天智天皇

秋の田の

かりほの

苫を

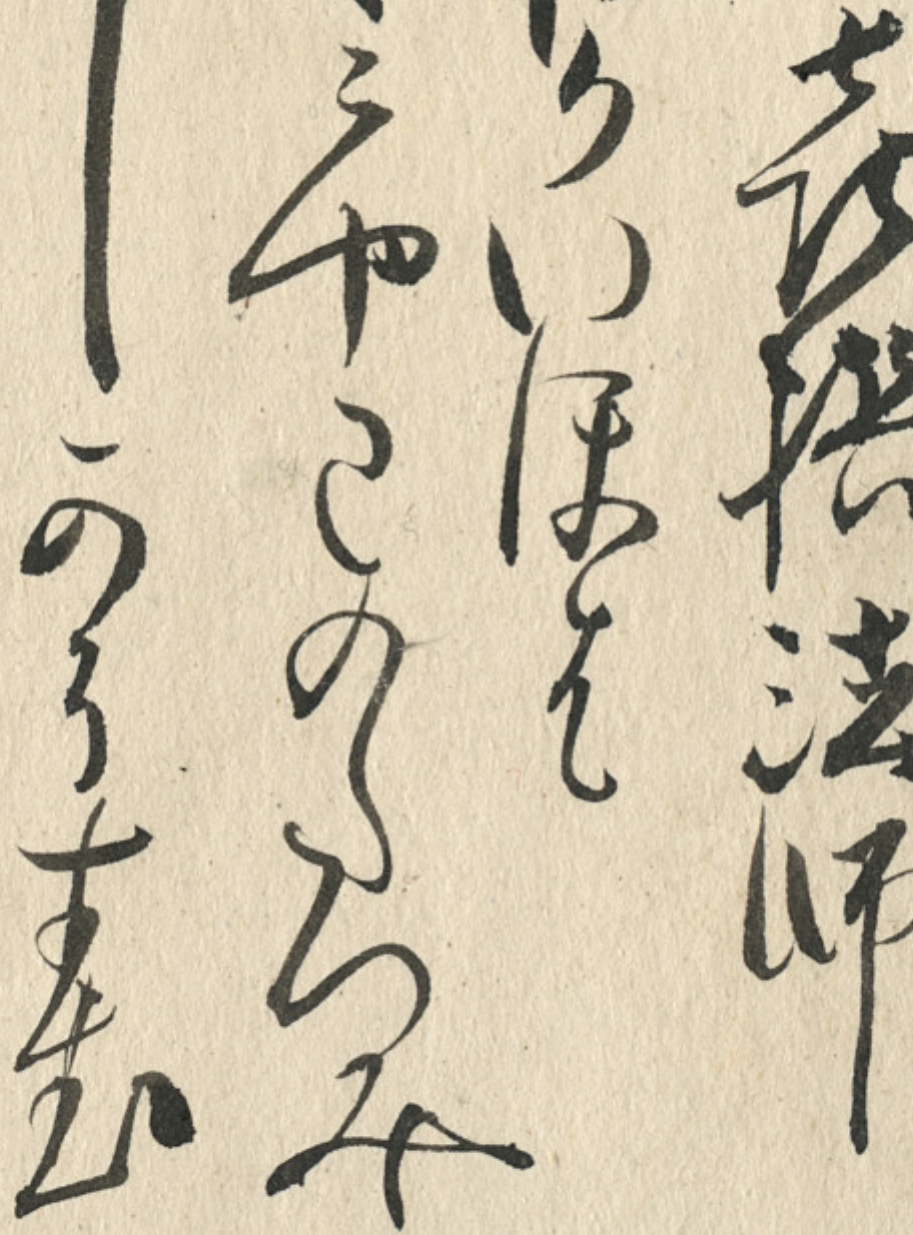
持統天皇

春すぎて夏きにけらし白妙の

柿を
うしまつの
名所
寺もり

猿丸大夫
おくやまに
もみぢふみ
けなくしぞ

安居休庵
主の家の
さけを
もらひ
みる

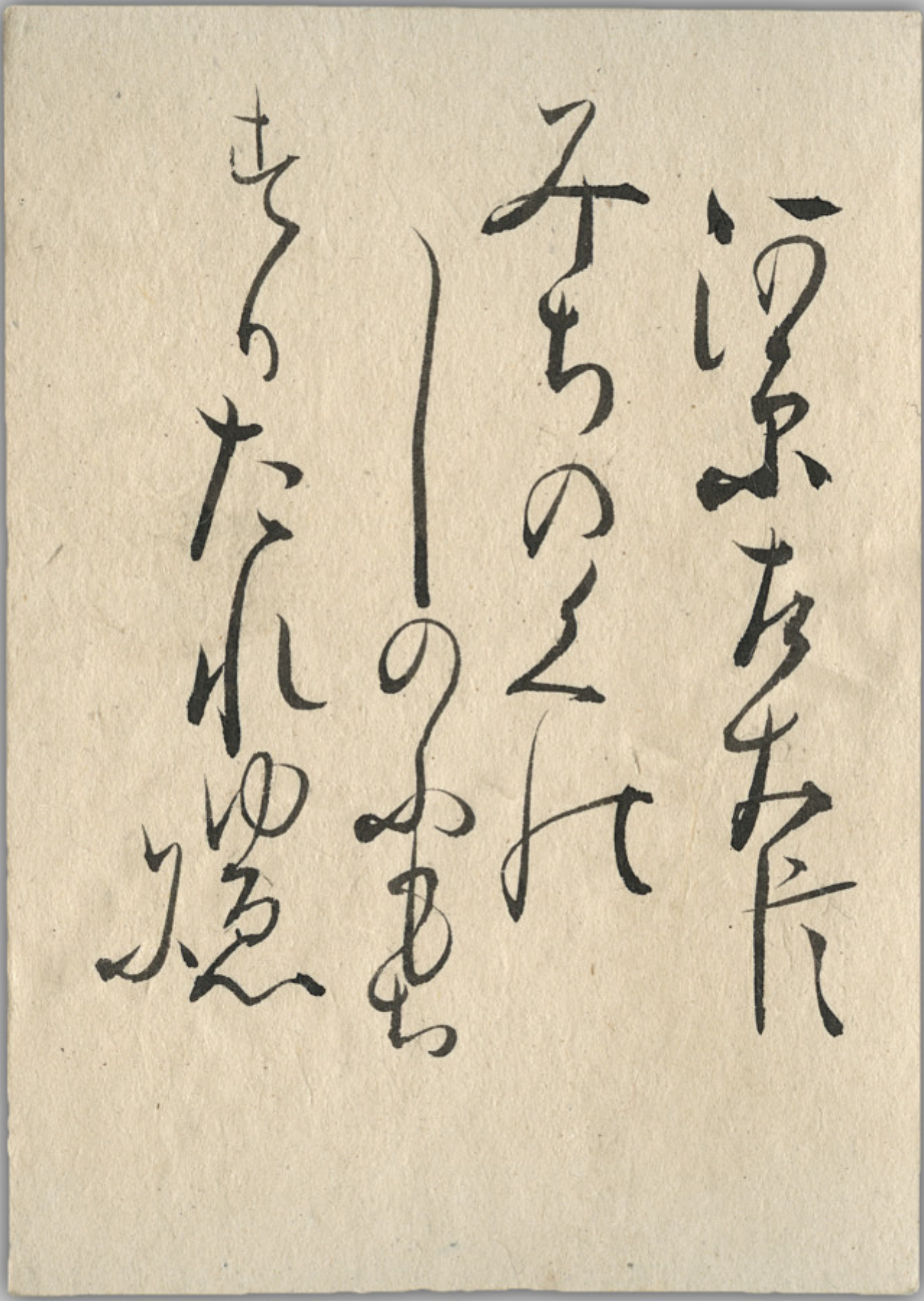


なかぞらに
ちりくるゆきの
ゆくへかな

桜丸
うれしさの
ゆくも
わすれて
うかれ
ぬる

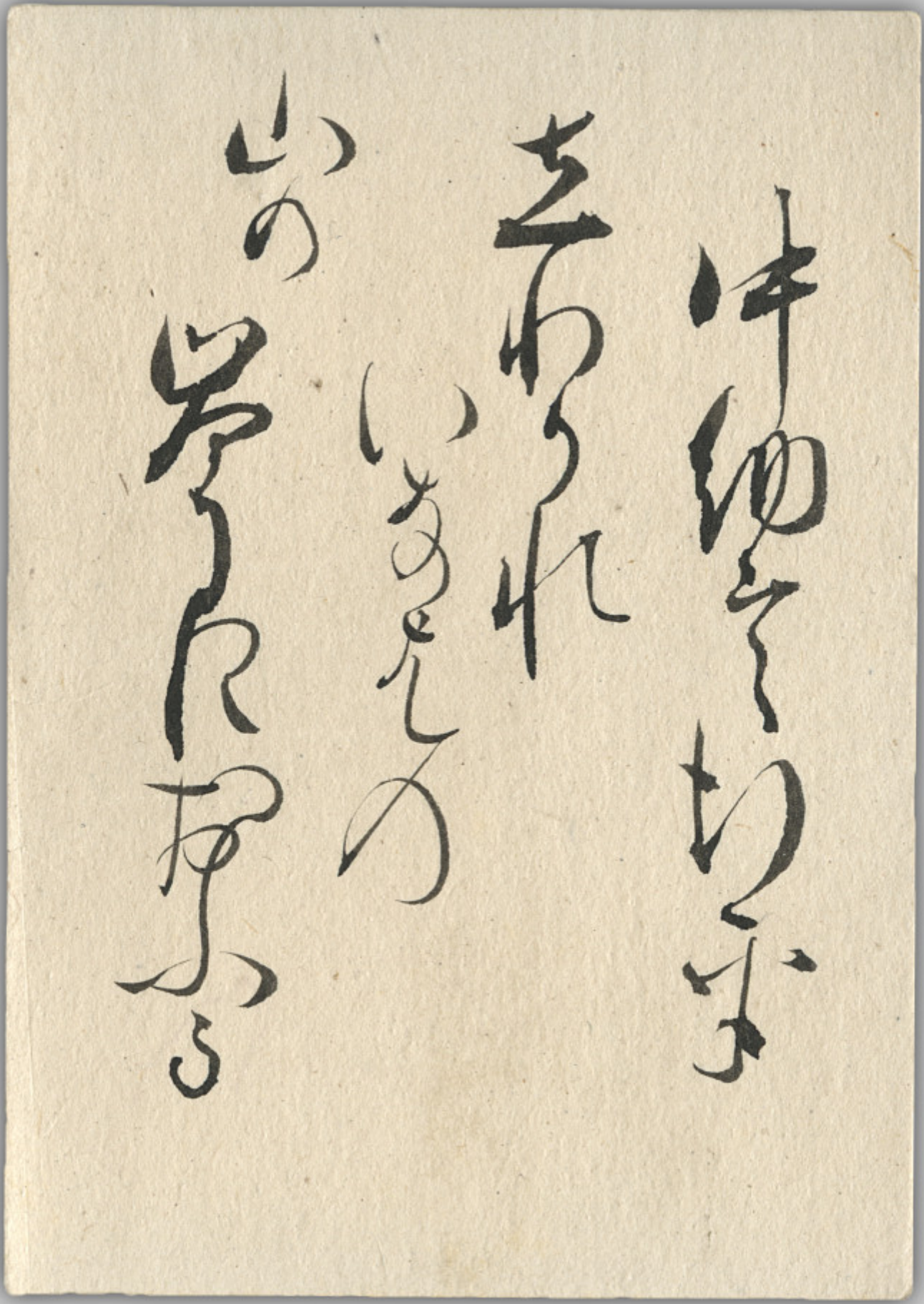
冬至後堂
前の木
葉落つ付て
見ゆるもの

陽炎や
ふるさとの
水
なつかしき



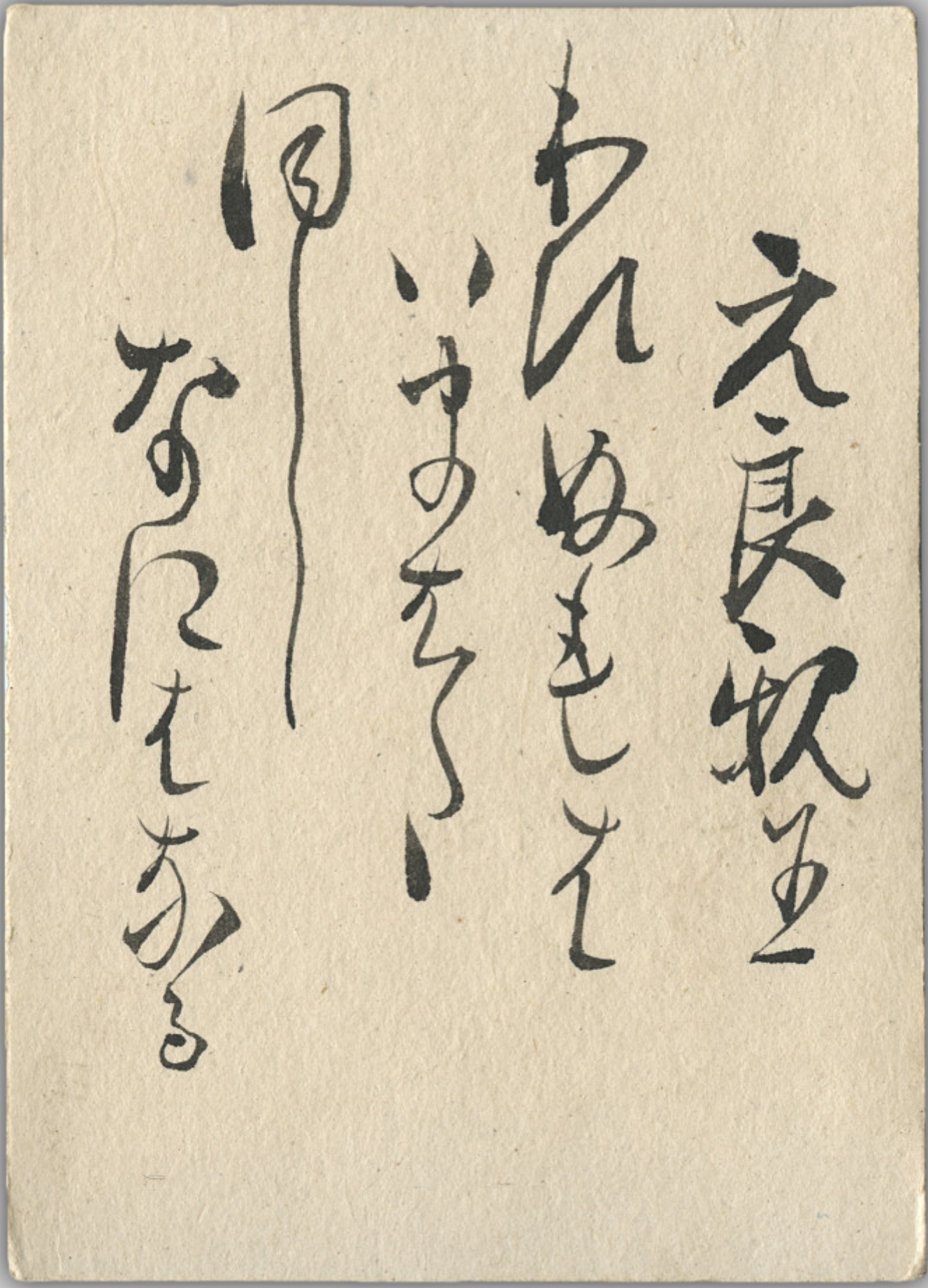
光孝天皇

きみがため
の野にいで
わかなつむ



茶の湯の男
手のうら
茶ふきん

年末
雑はうし
みーまで
ちーこ
ふーのまも



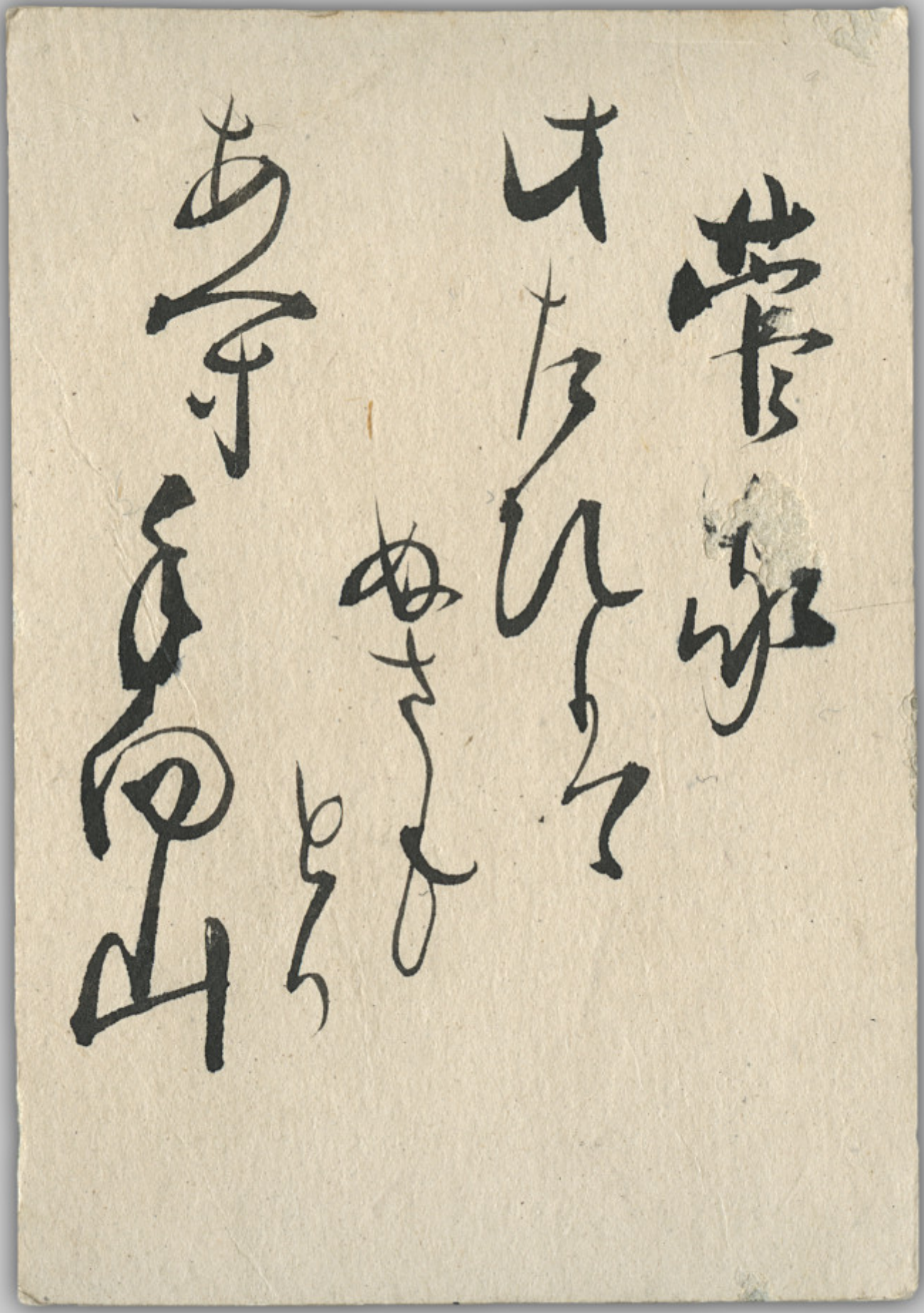
素性法師

いまもむかしも

月はの

文展康秀
吟ろに林の
茅本の
声ほそし

大江戸
月と
ちよ
もの
ろう
流れ
けれ



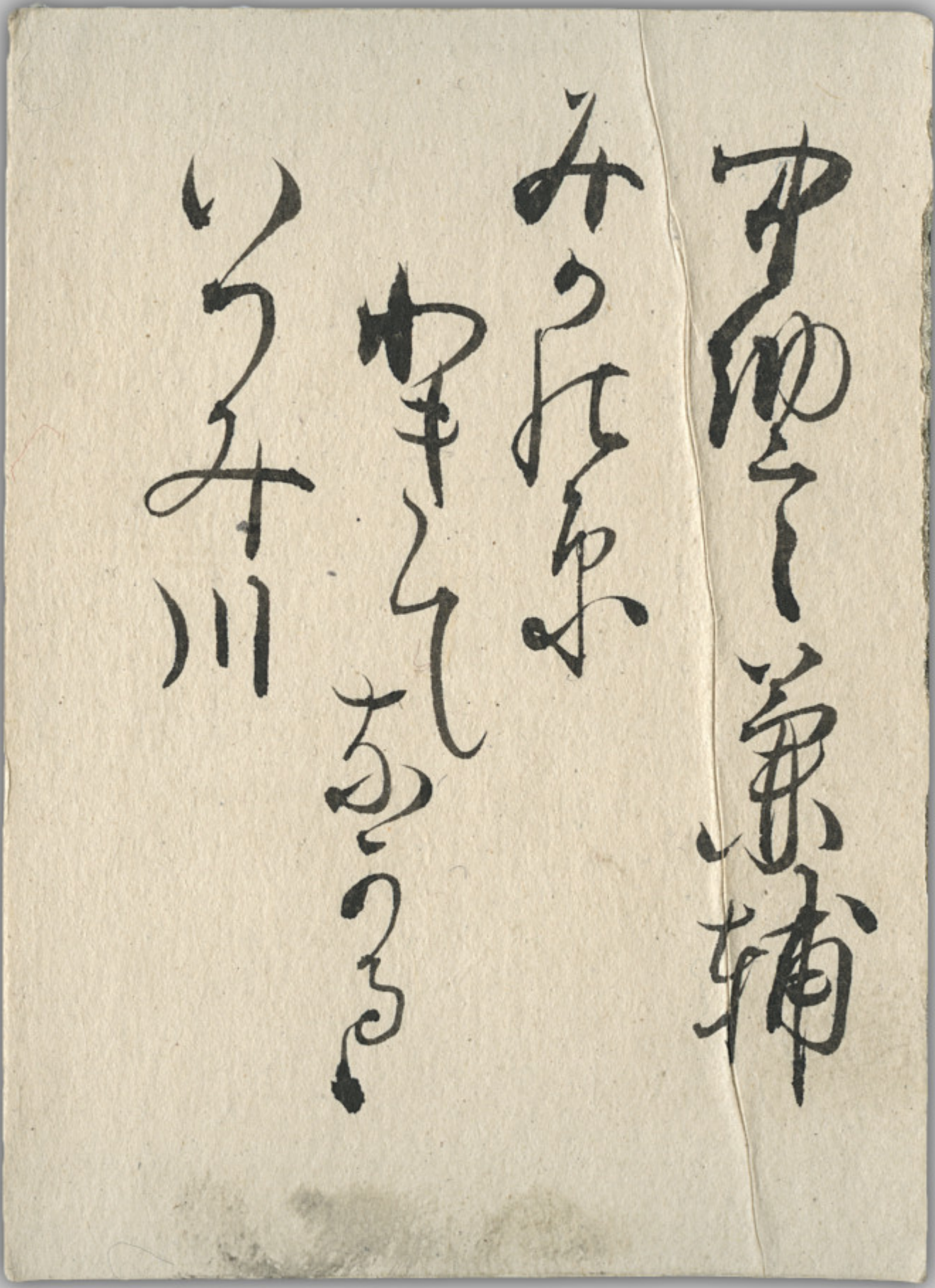
三條右大臣

名にしおはゝ

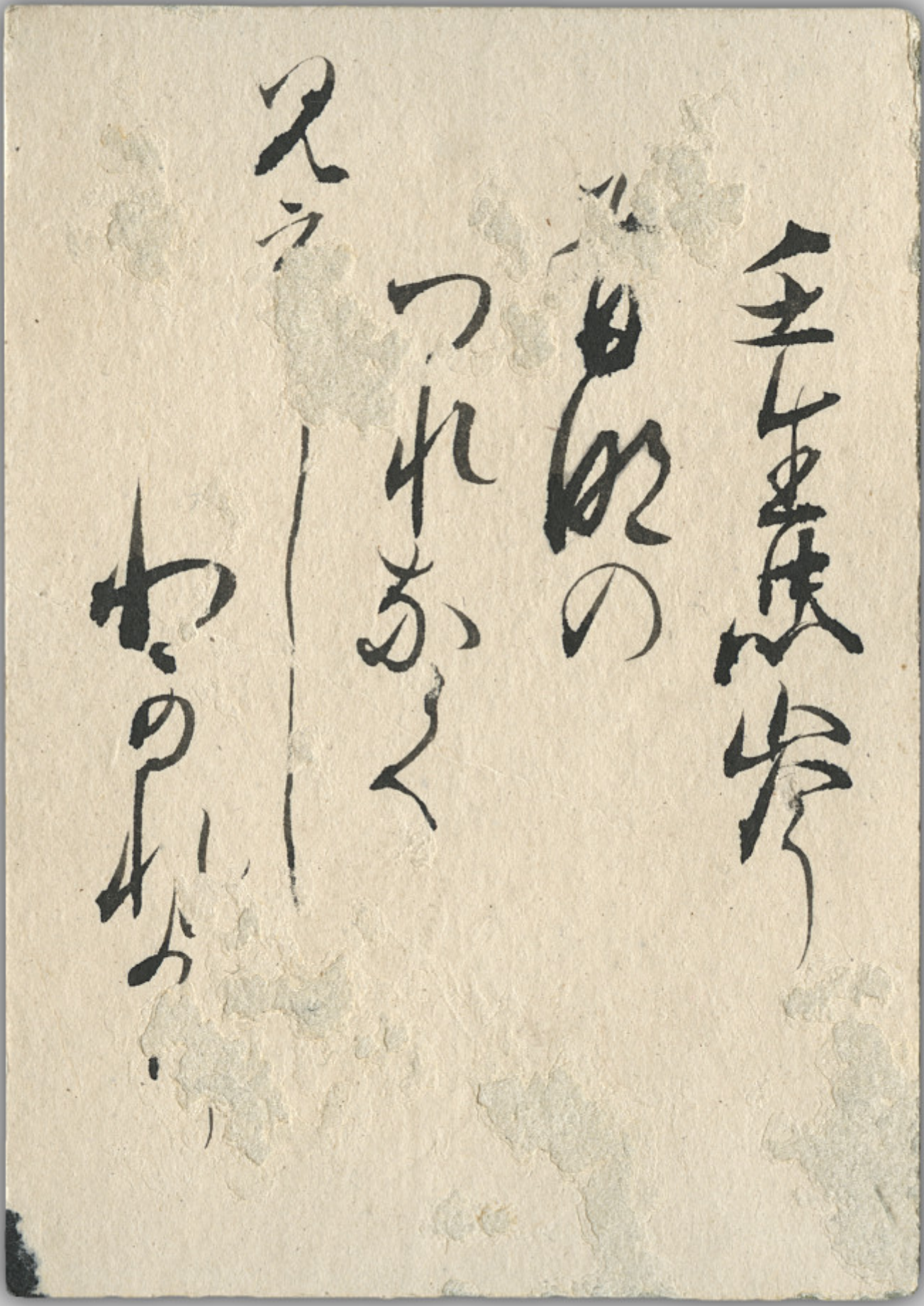
あふさかの

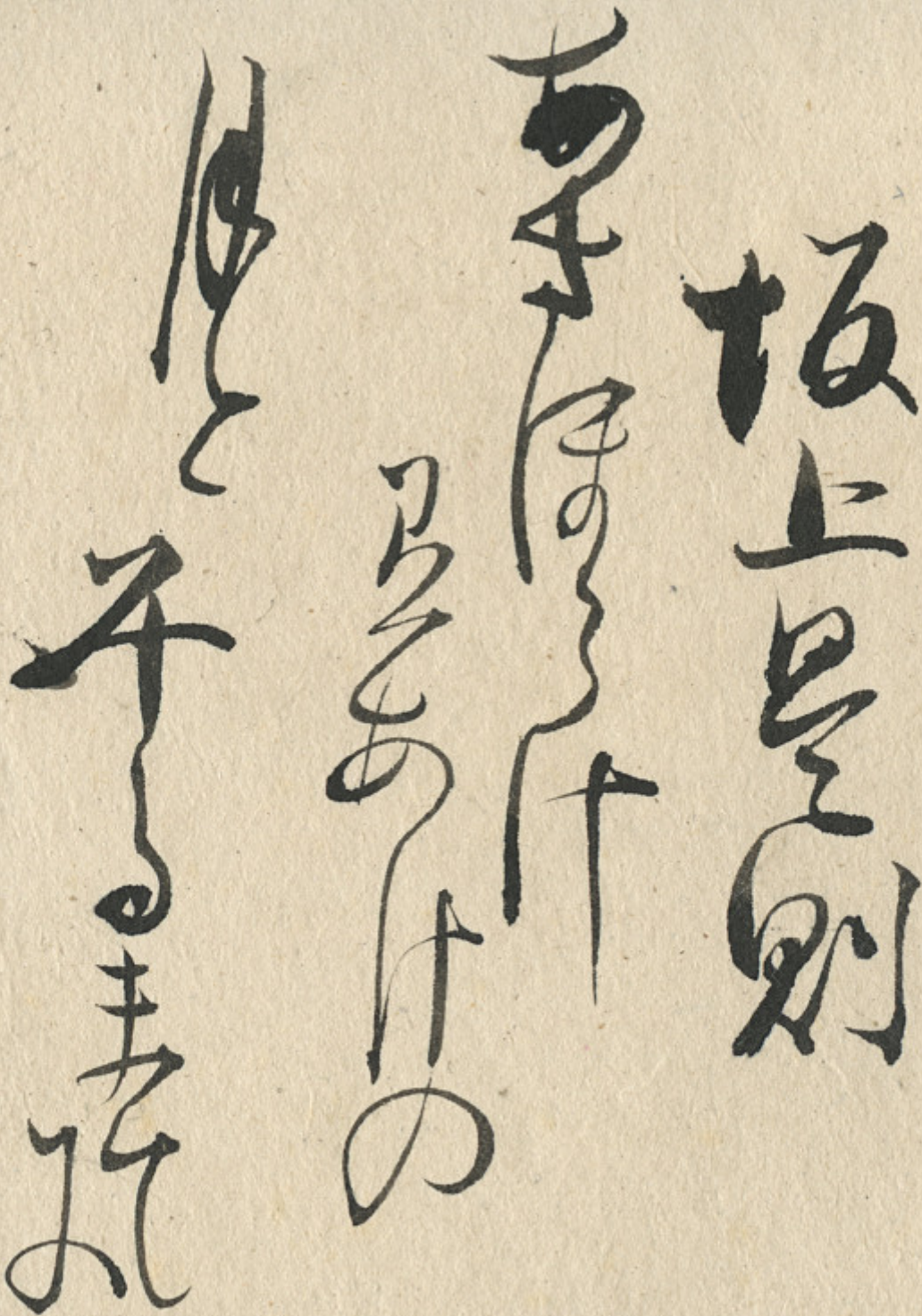
せきもる

貴信之
小倉山
夢ぬ
みち来、
ちらは



死の如き
こころあて
もとめ
神
声





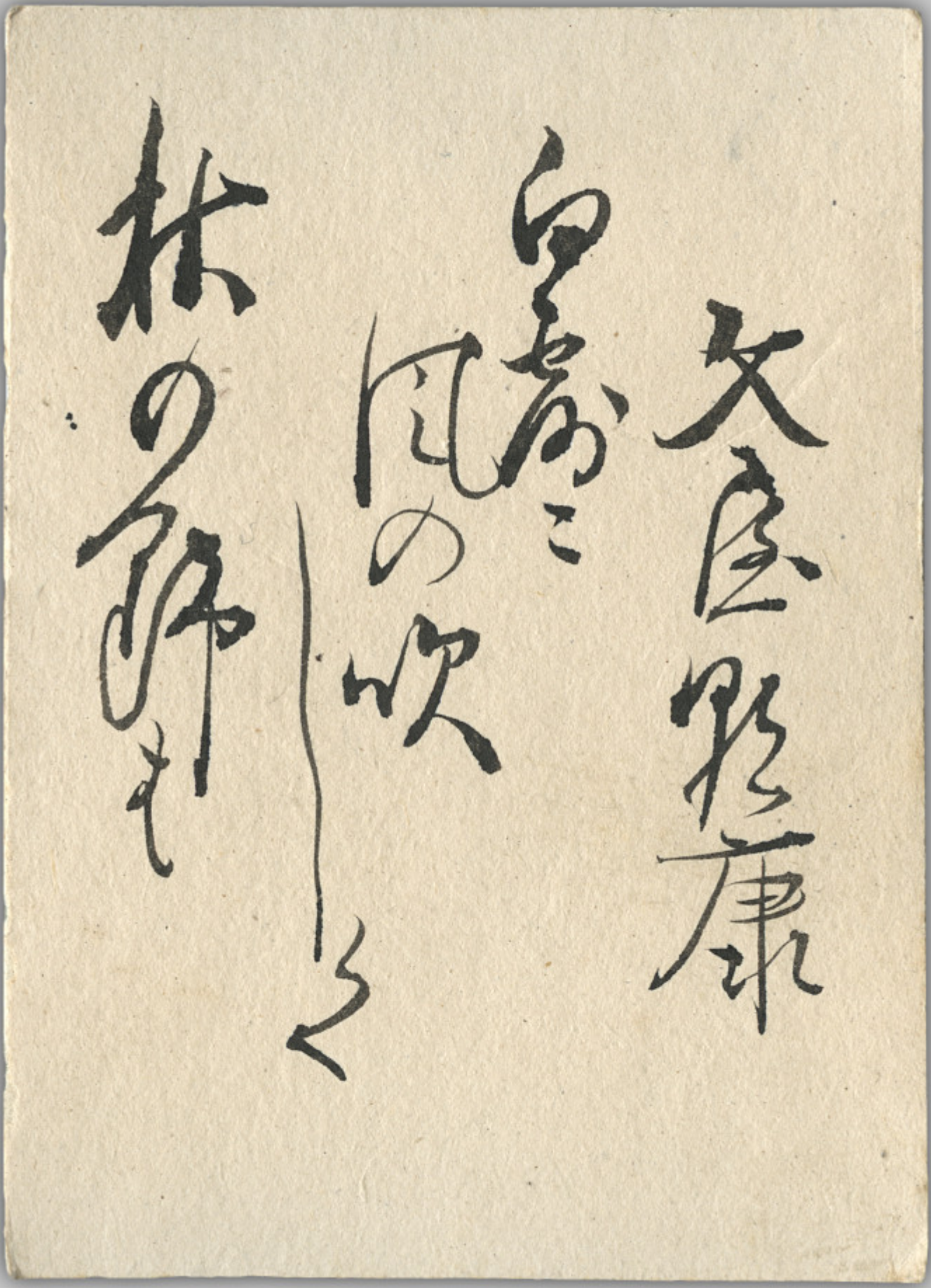
春を別れ
谷の風の
うぐひす

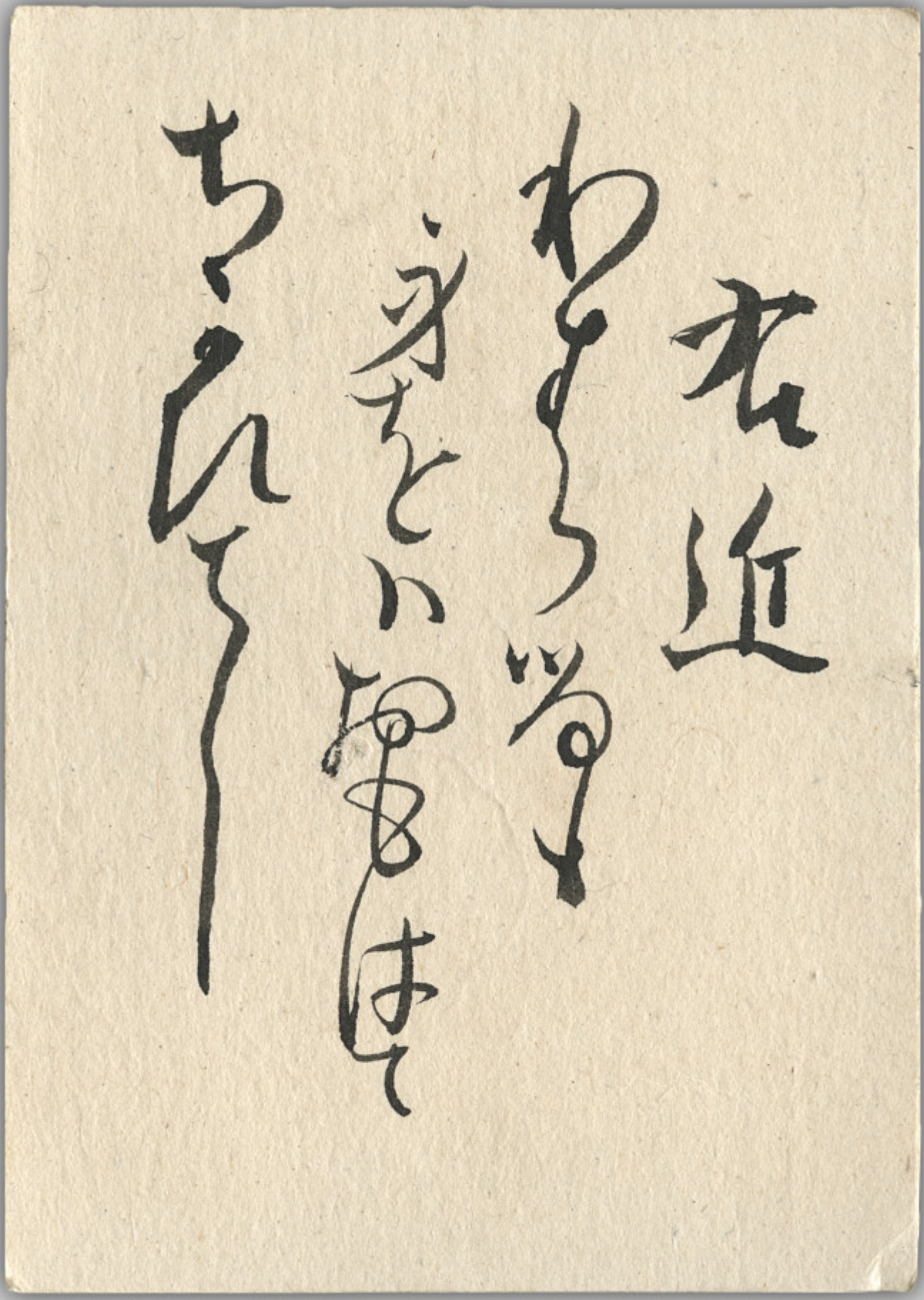
紅友別
るるのち
のちもし
もの日に

海苔屋
れきとう
しるし
つまもの
こうせん

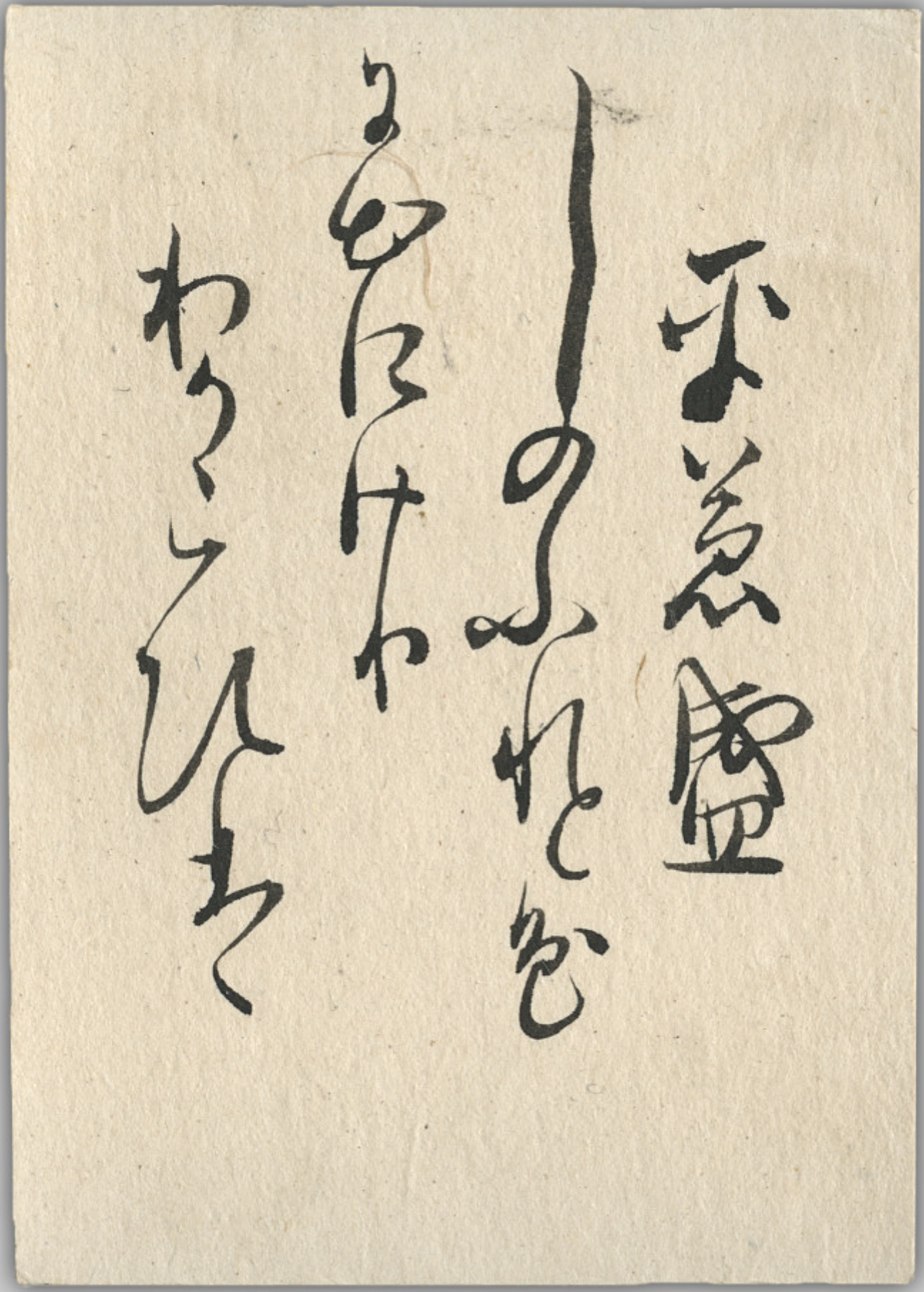
ありそうで
なかなかない
しらたま

清栄深き父
上の恵と
まもる守り
あれかしと





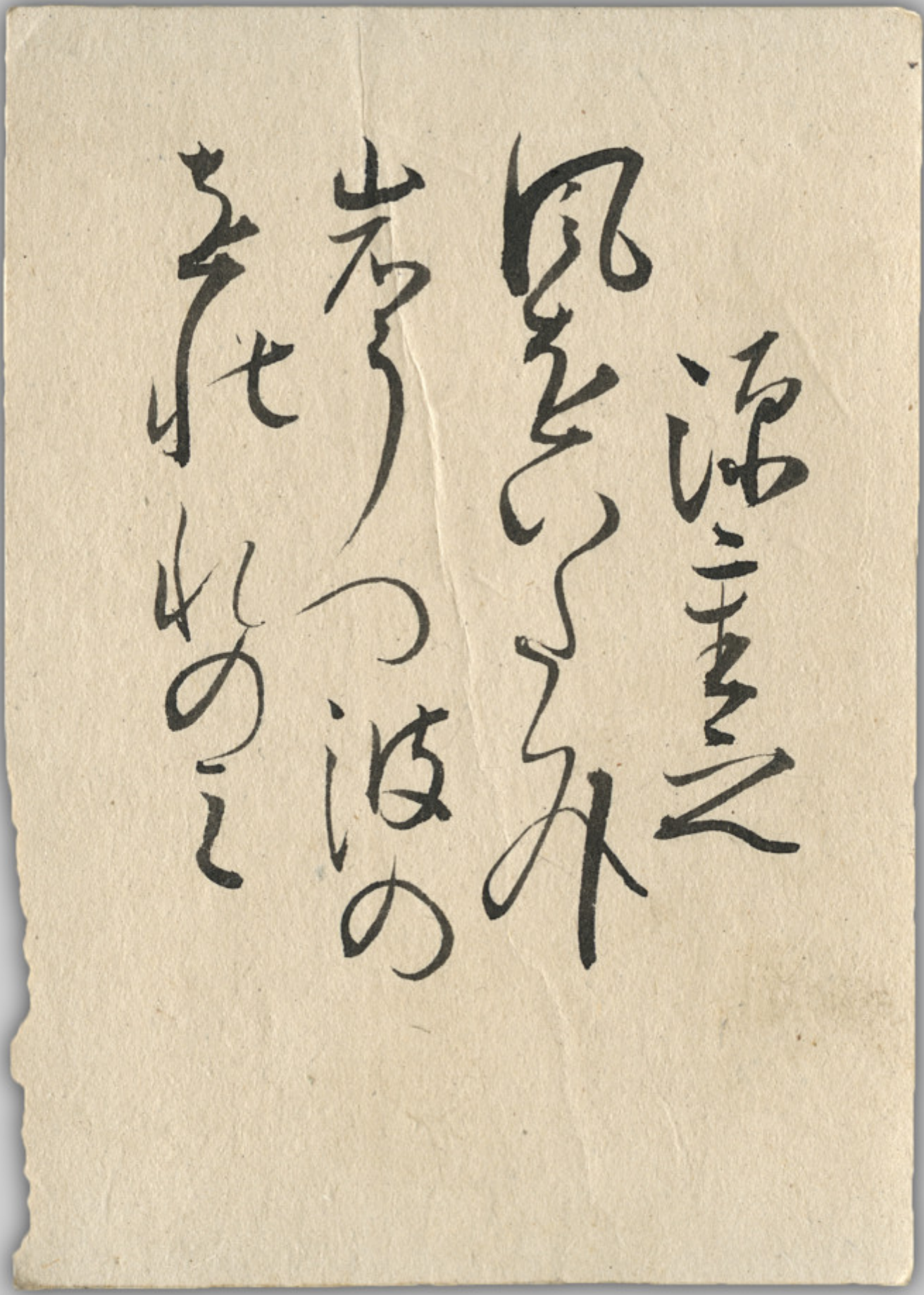
矢張為
清書を
かいの



淡雪の
ちぎりきれ
うつみおろして
しほりかな

薄化粧
あとれも
ふ
如月廿三日

の

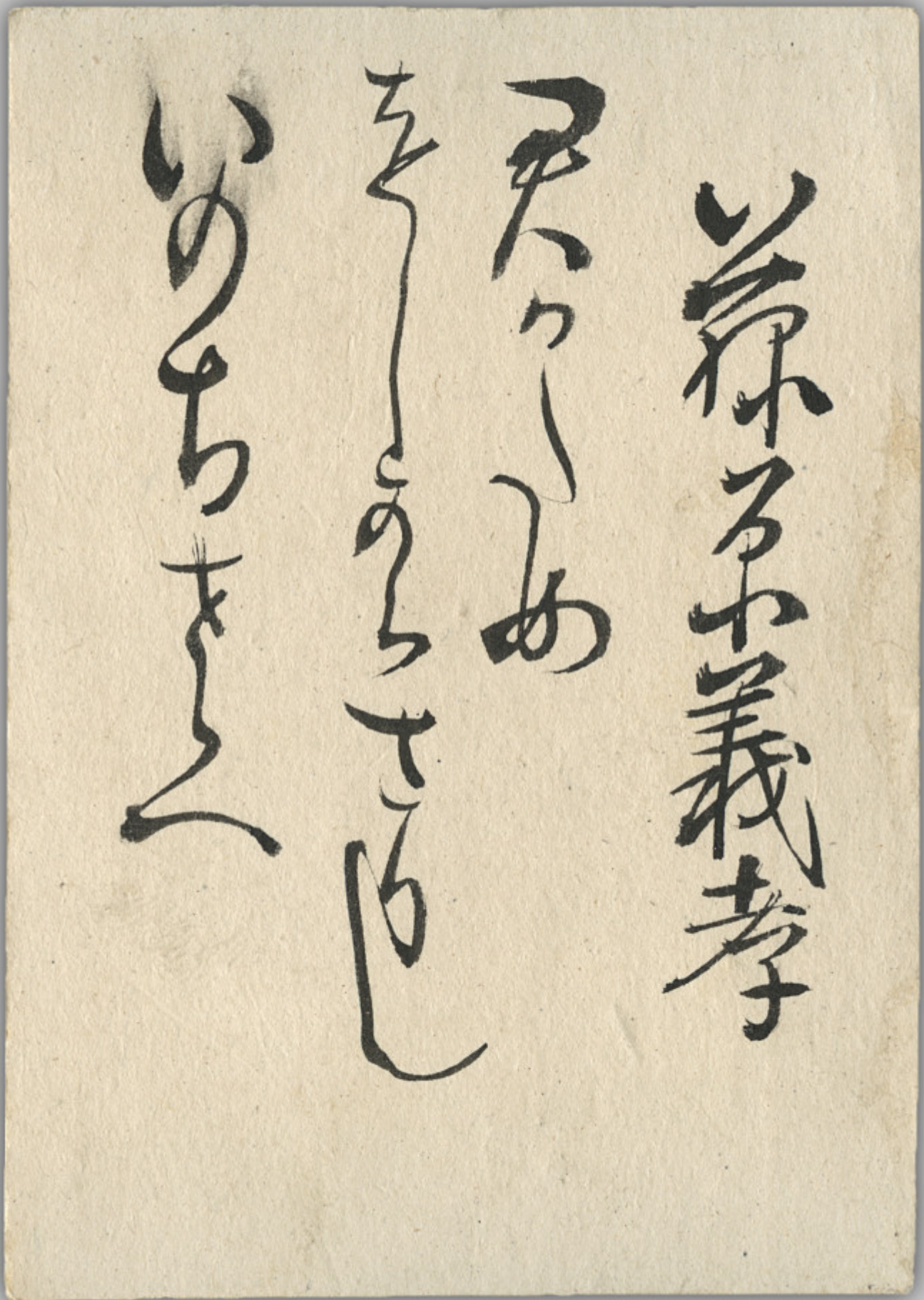


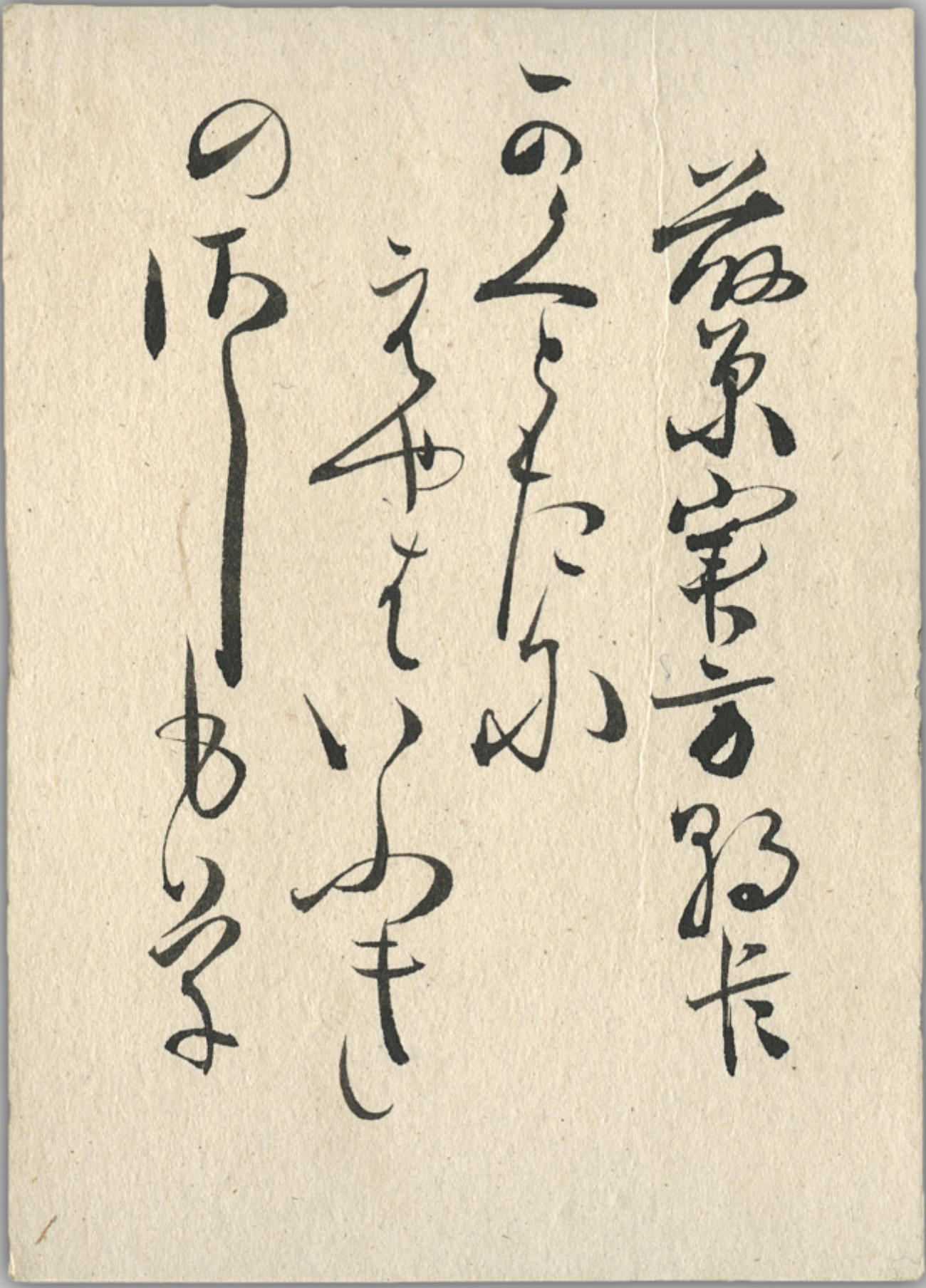
大本営発表

堤塘の染土の

さくや花

東そもえて



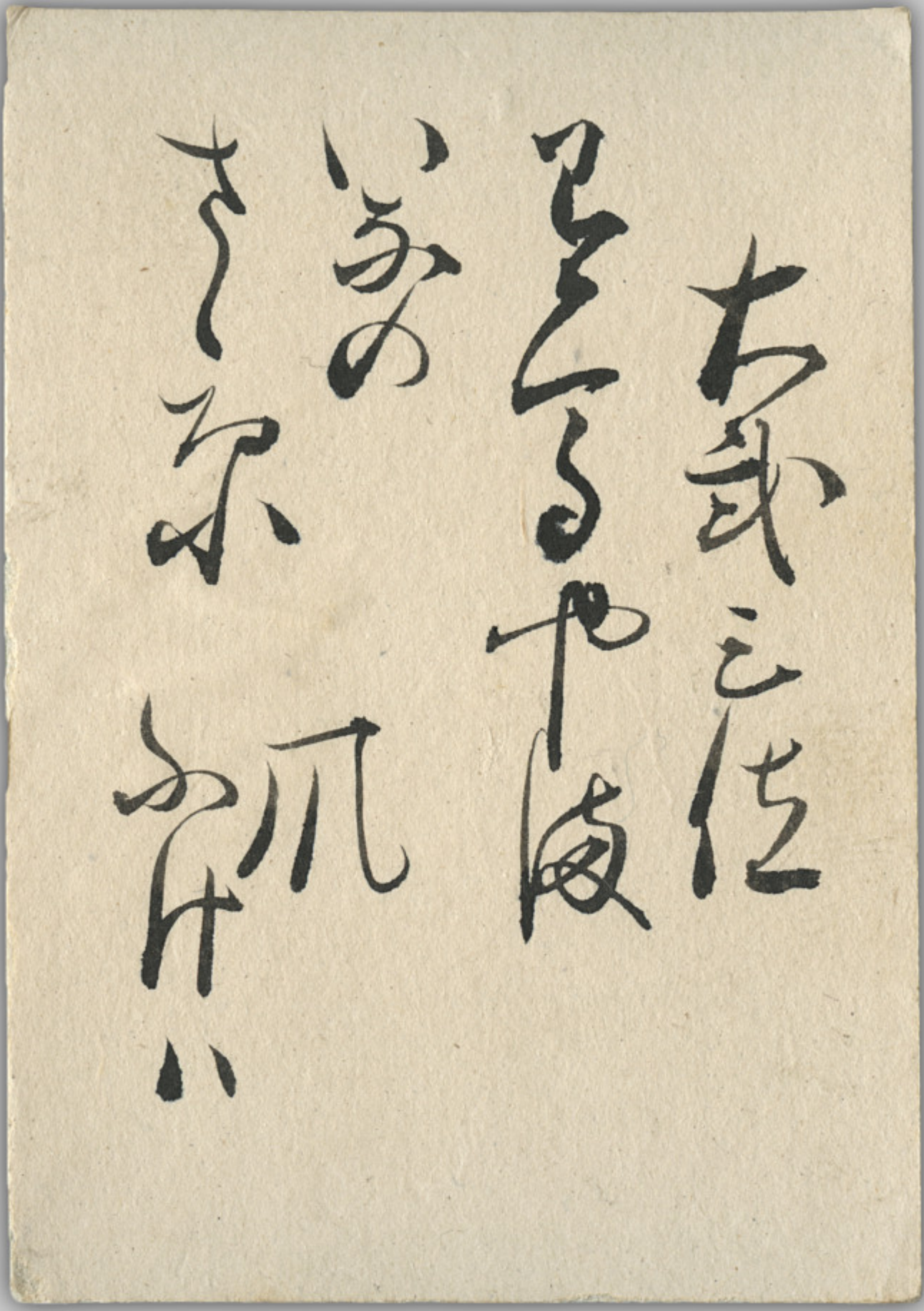


後園二司馬

大納言佐
たもとのあか
ふしをしく
あけてもまたも

秋の式
あらそふこの
よのほろび
知れよ

紫草の
にほへる妹を
憎くあらば
人妻故に
我恋めやも



赤海苔の
やまとは何
ぬのまゝ
ものをもよふけて

小式部内侍

かくとだに

えやはいぶきの

さしも草

さもこそ人を

おもふとは

伊勢の海
おきつ白浪
たつた山
夜半に越ゆらむ

清き池に
影こそ見えて
うつろはめ

左京太夫雅
冬ハ
おもへ
絶なむも
はつる

相模

うらみわび
ほさぬそでだに
あるものを

六

三條殿
ふもと
あそん
うま
芸

祇園清水
うつろふ
みねもの山も
春ちかし

大和絵に
ゆきふれて
ふるさとの
いろも高まれ

秋の田の刈
穂にもくうる
いの宿れ
ひぐらし

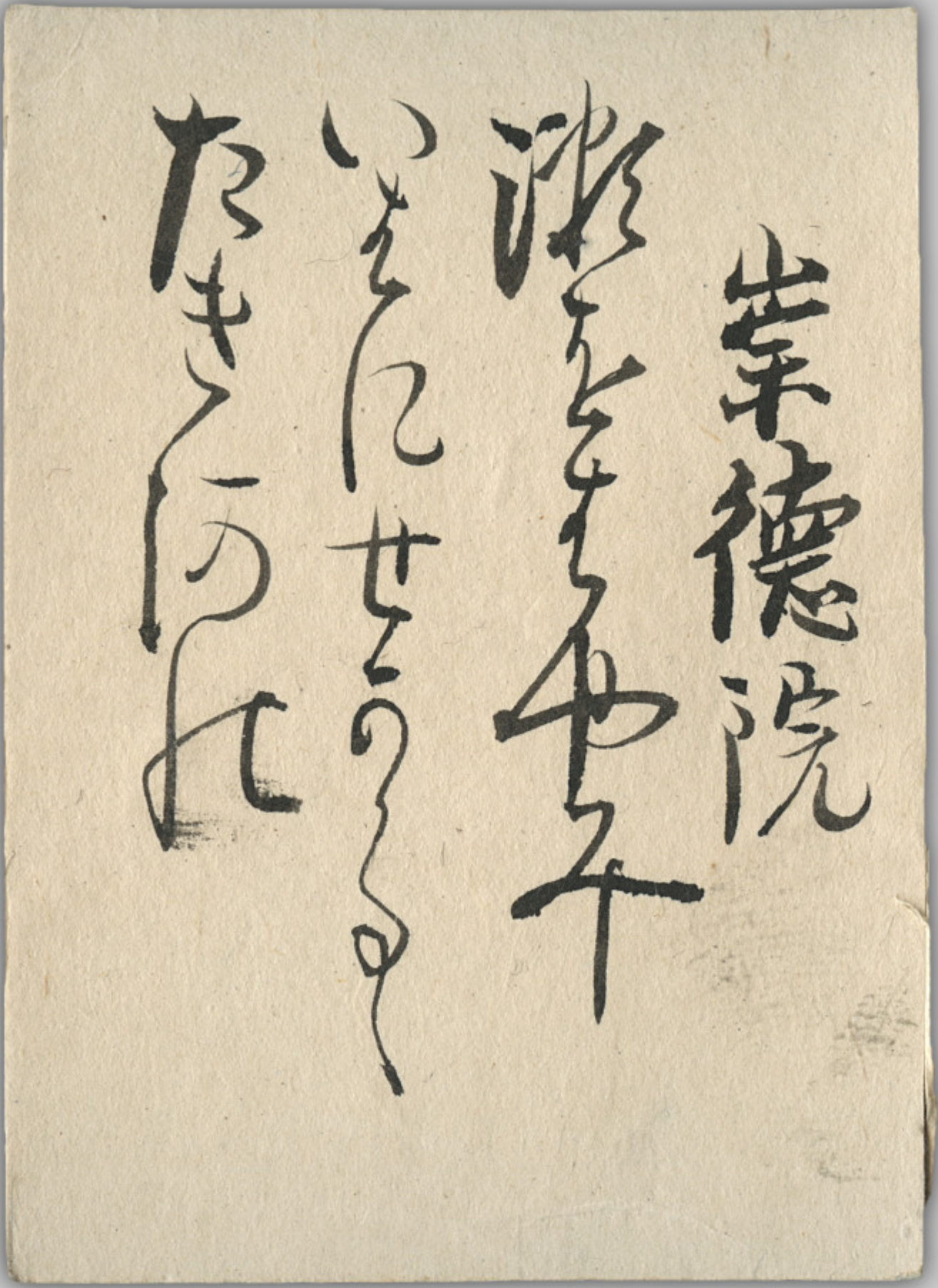
前後不覚
三分の
尾上の
桜咲きけり

法性寺入道前関白太政大臣

春のそらつれなくかすめる

みねの雲

ひとすじにたなびきはてぬ



源兼昌

淡路島
かよふ千鳥の
なくこゑに

左京まの所輔
君を生たたか
ひくやそ氏
小えまのり

落ついた花瓶
なのうらもいも
しらん
思うた

道風法師

あめつちの

さてもいのちを

うつしもの

皇太后宮大夫俊成

春の日よ

ろこう

あけれ

いう

落葉浄瑠璃

ふるさとまつり

この夕べ

寺も祝ふ

西行法師

なきとこそ

思ふ

あはれ

麻苧洗浄
村肝の心を
苧に
まぐひぬ

お母様も
お体をよく
なさって
ください

殿門流水痛

みさをなれ

ものの神

二條院讃岐

わろうて

しほたる

みえぬ

沖のかもめ

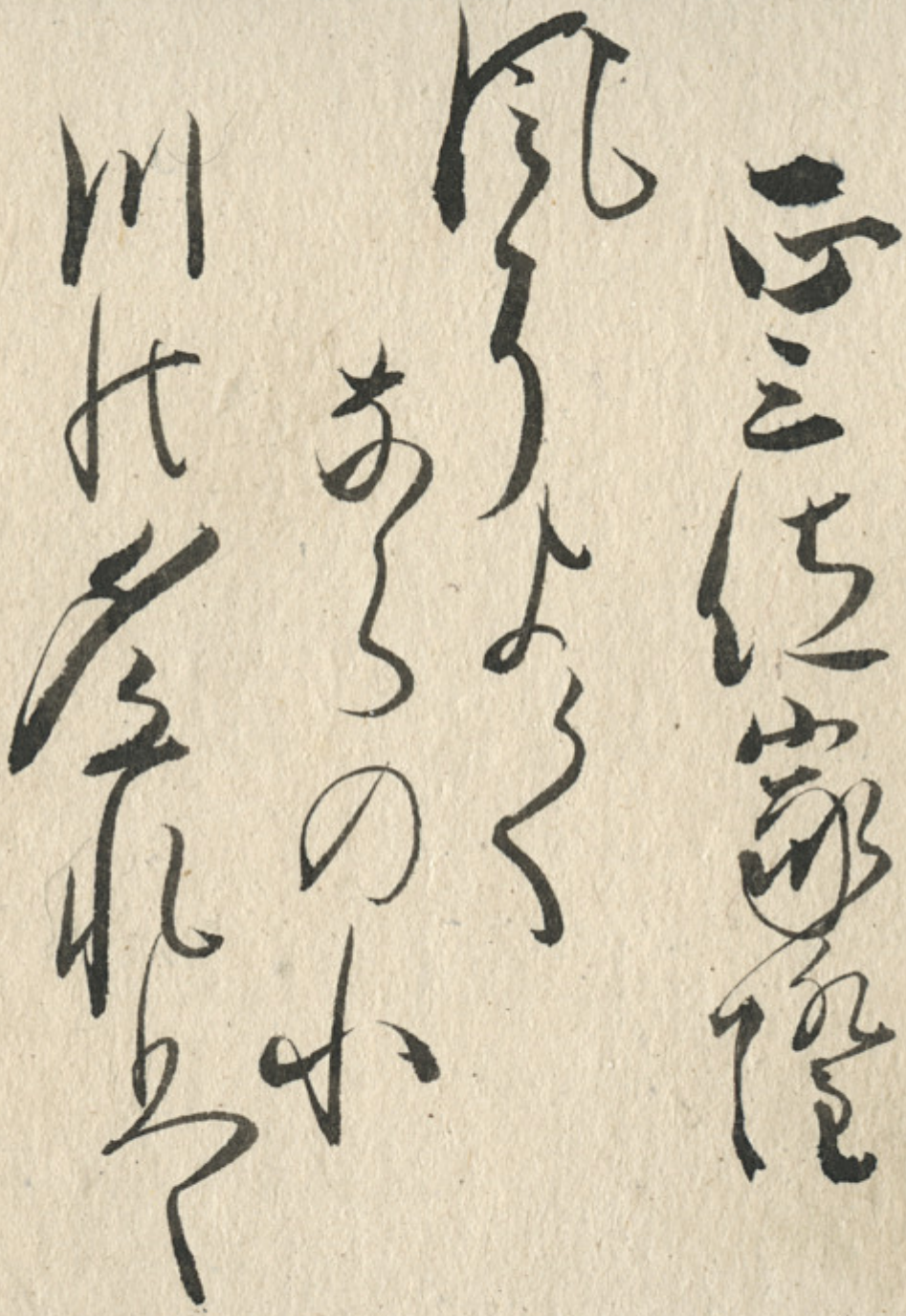
春の
なるもの

矢ふ後雅経

みよしの

山のあなたの

空とほく

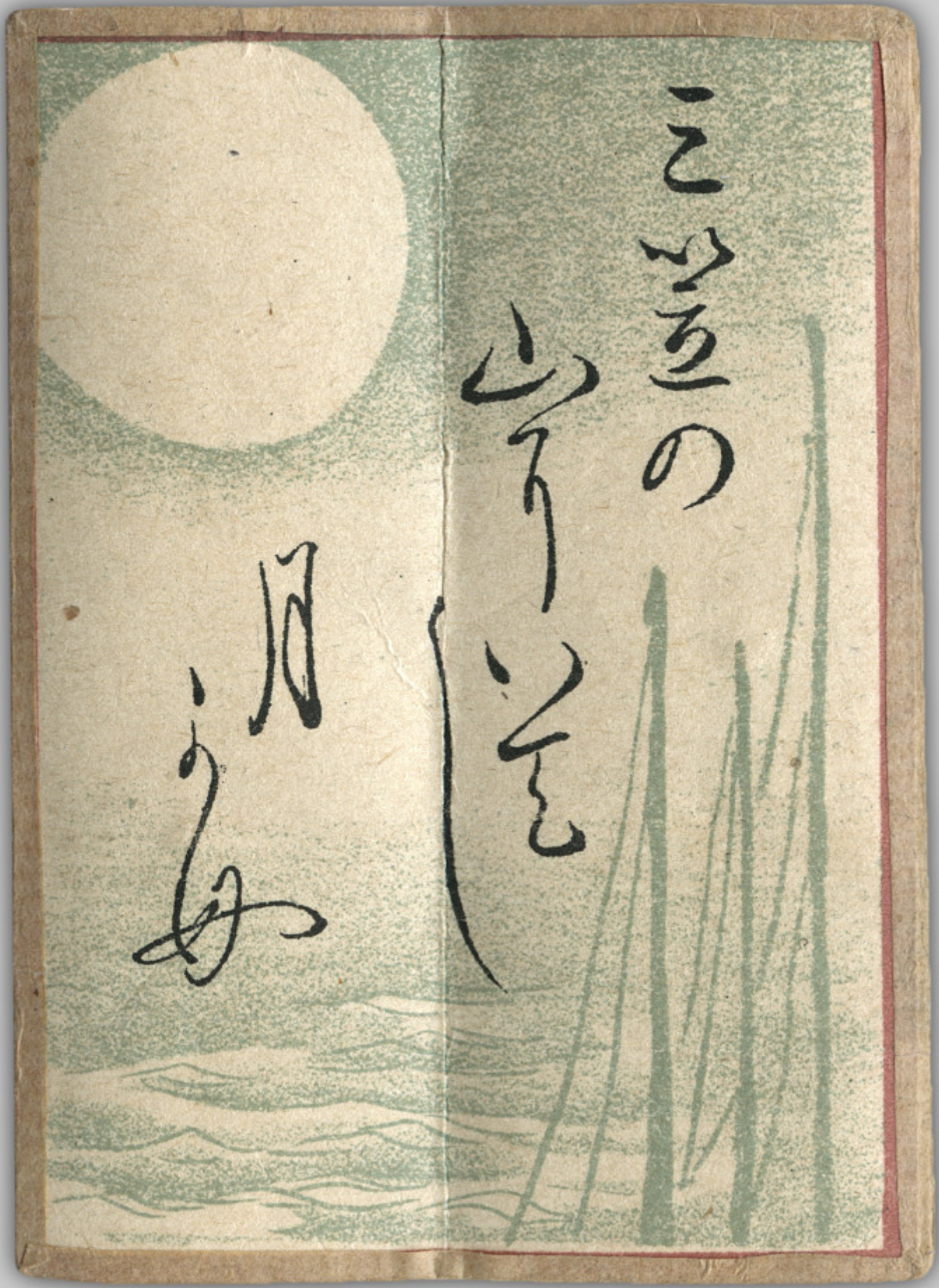


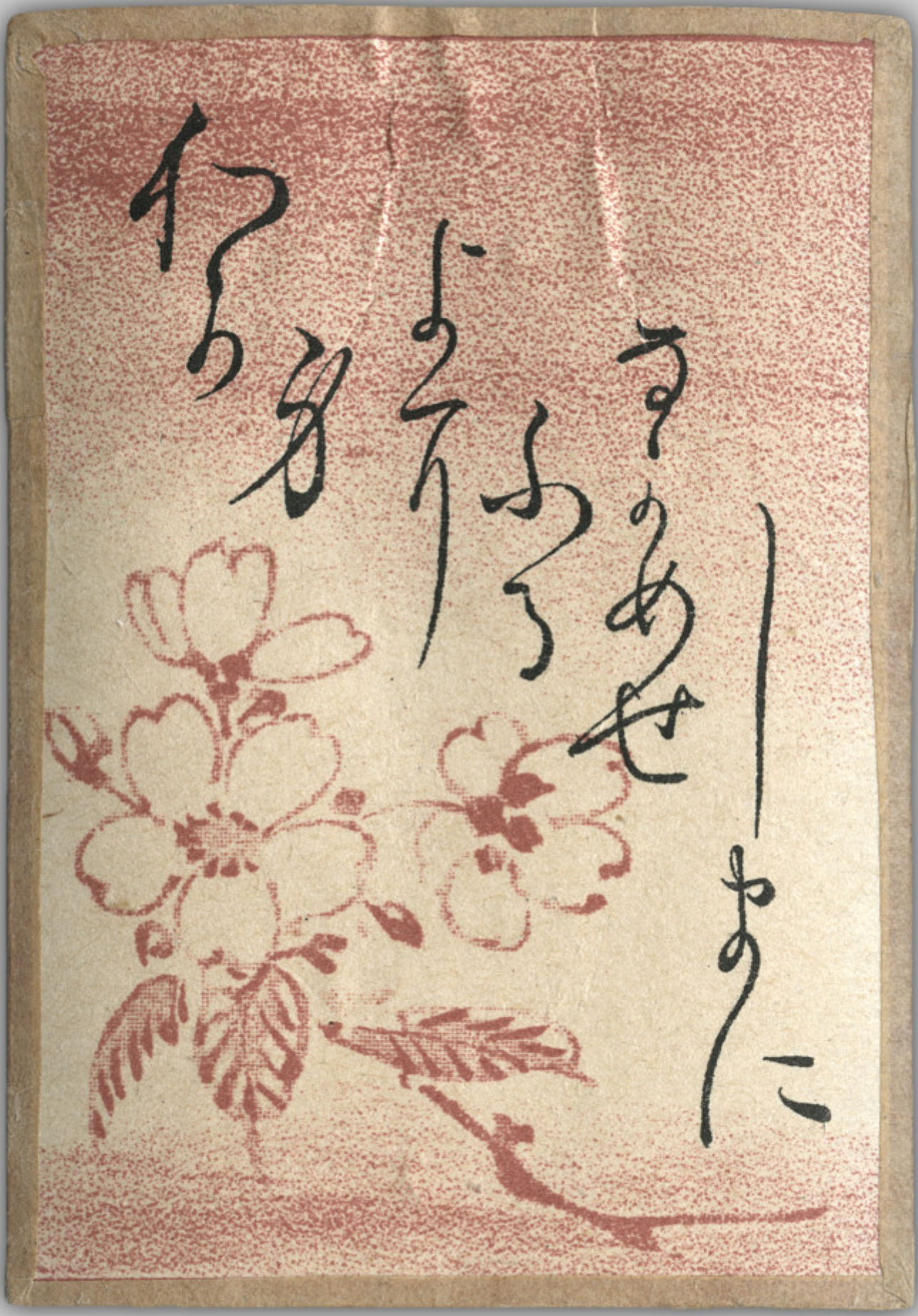
順徳院

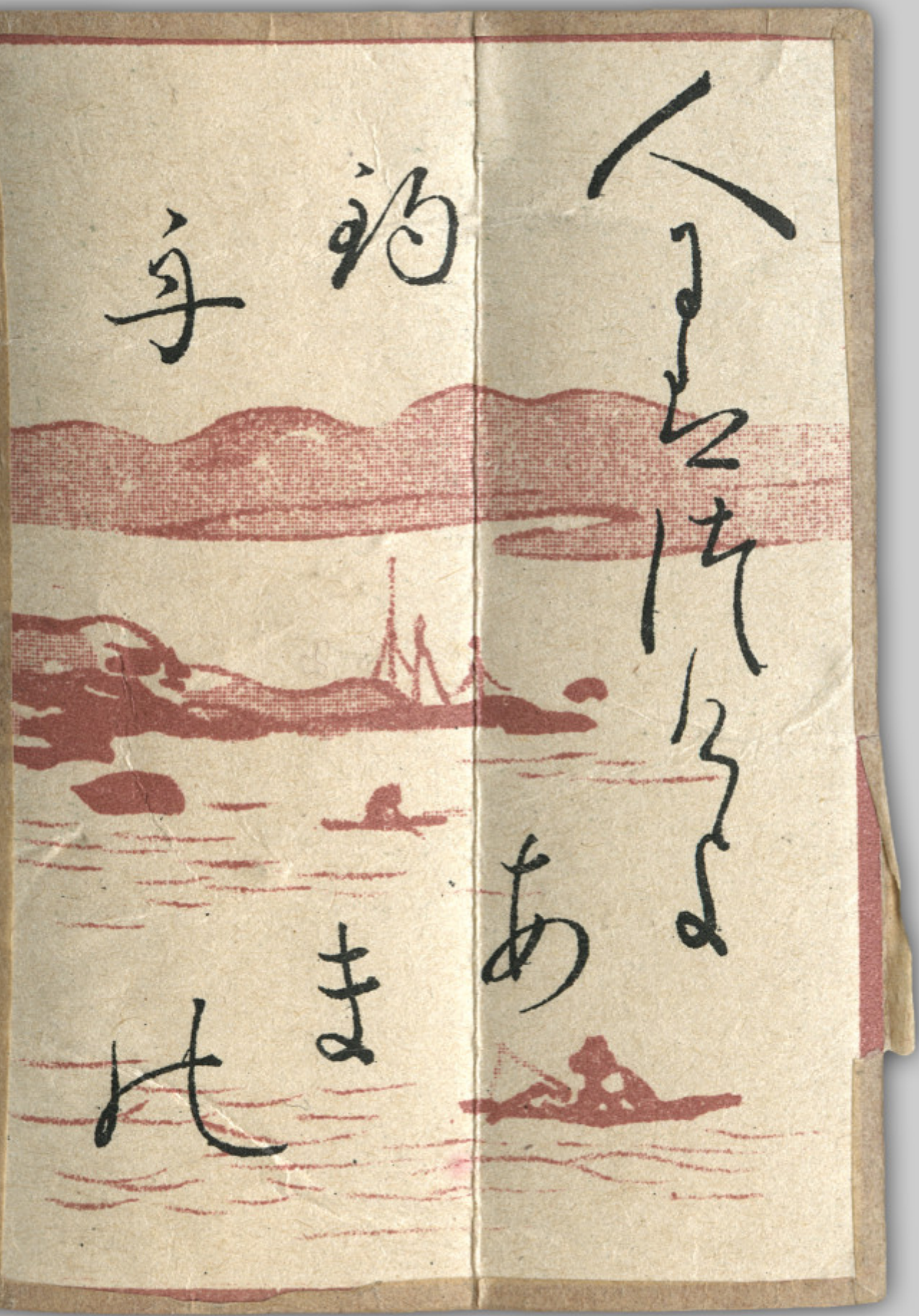
ゆふまぐれ
みるめのそでを
志ほなれて

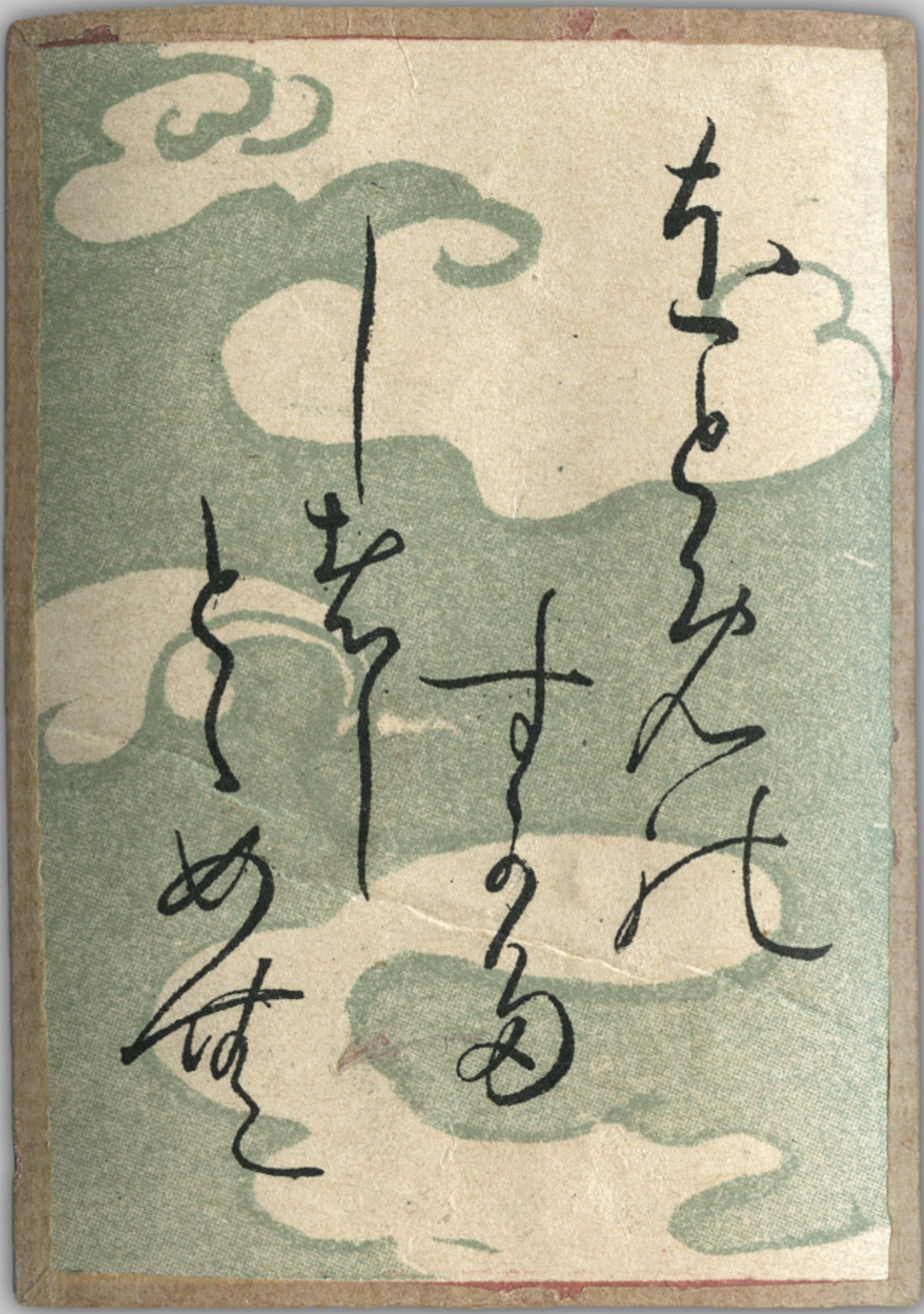
我が家の
庭の
もみじ
つ

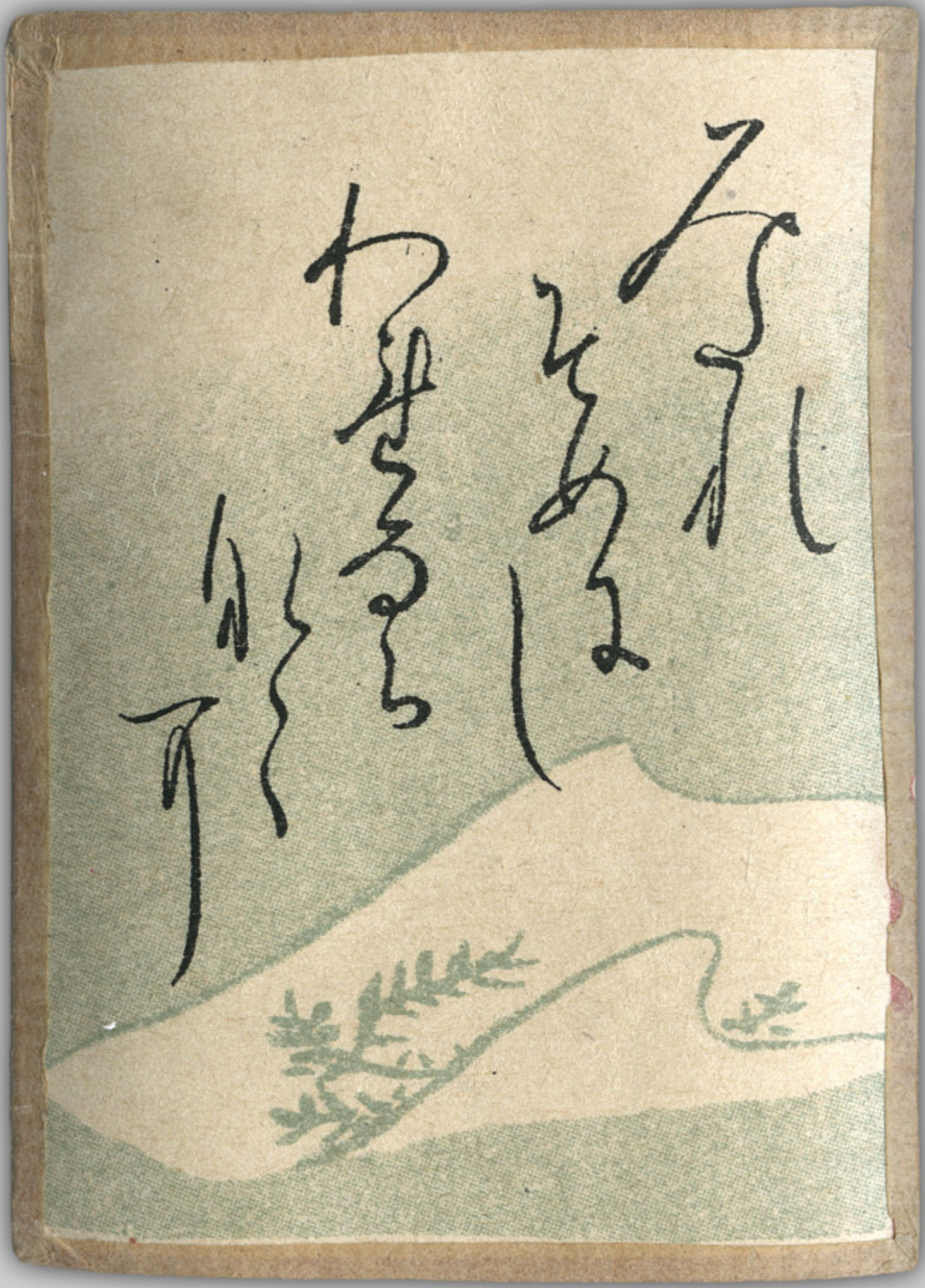
# 家まで送ります






今年はよろしくお願いします





わすれてや
雪はふるらん

あそびませう

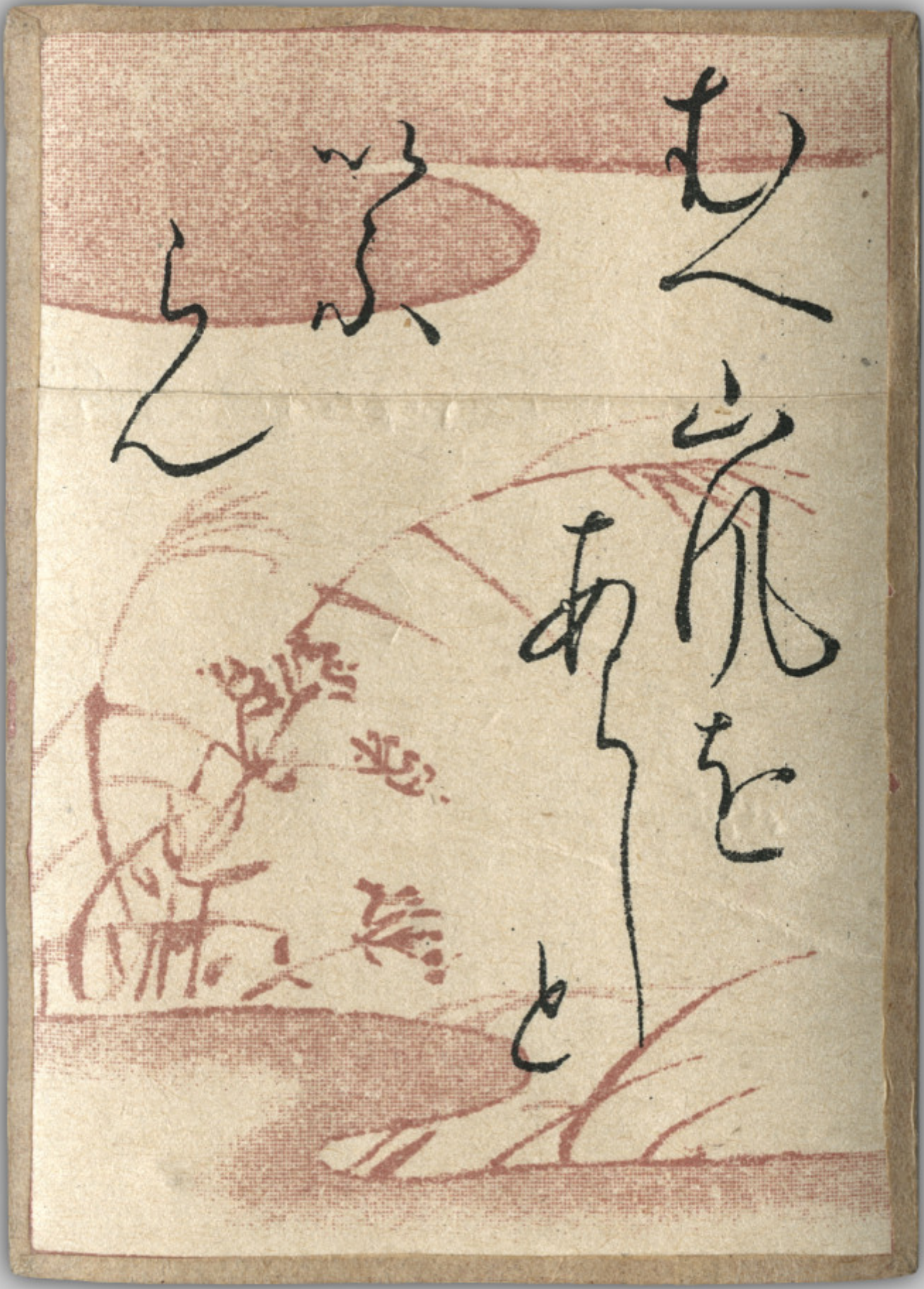
はしりませう

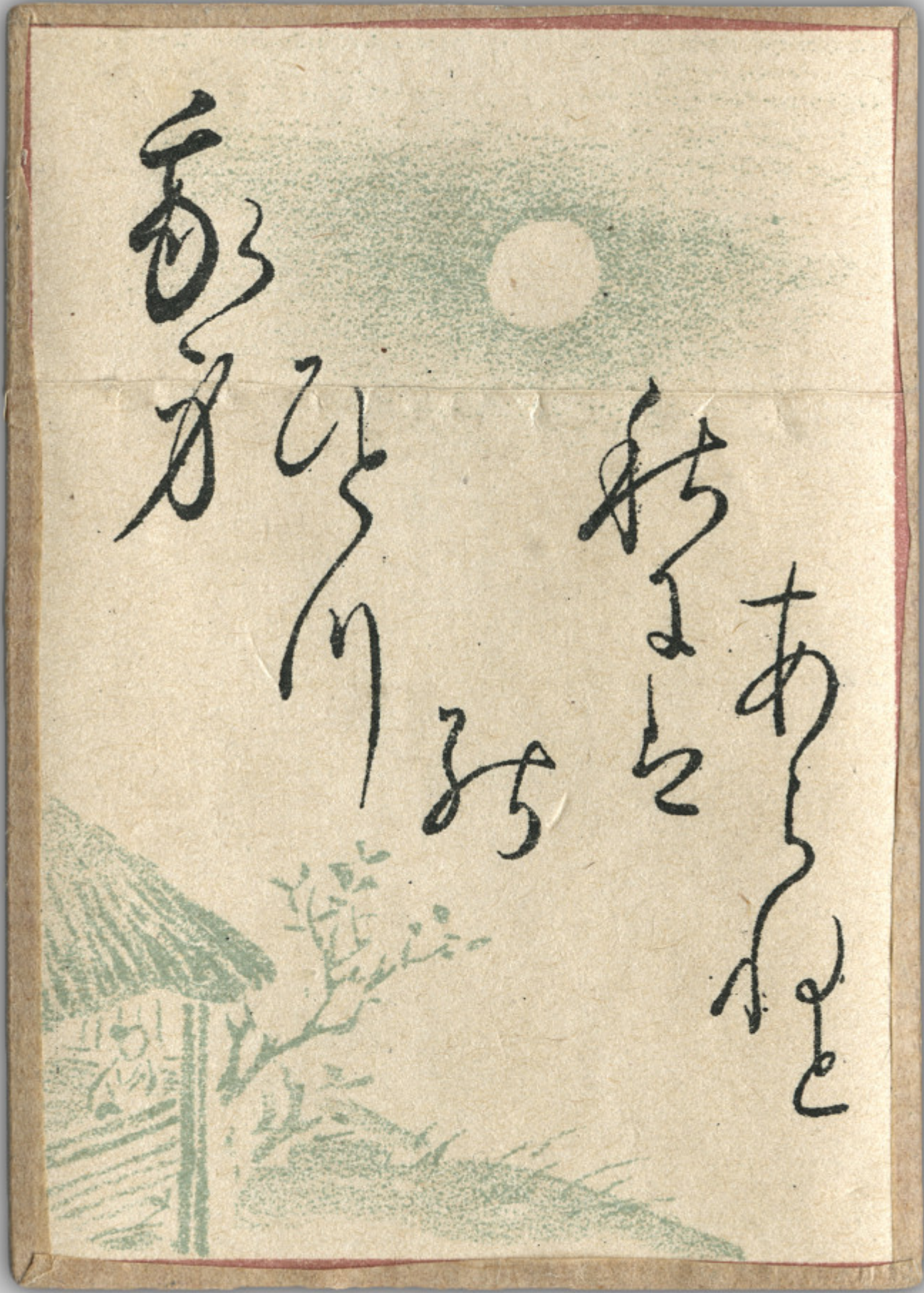
ねませう

出うれ

あまあまの

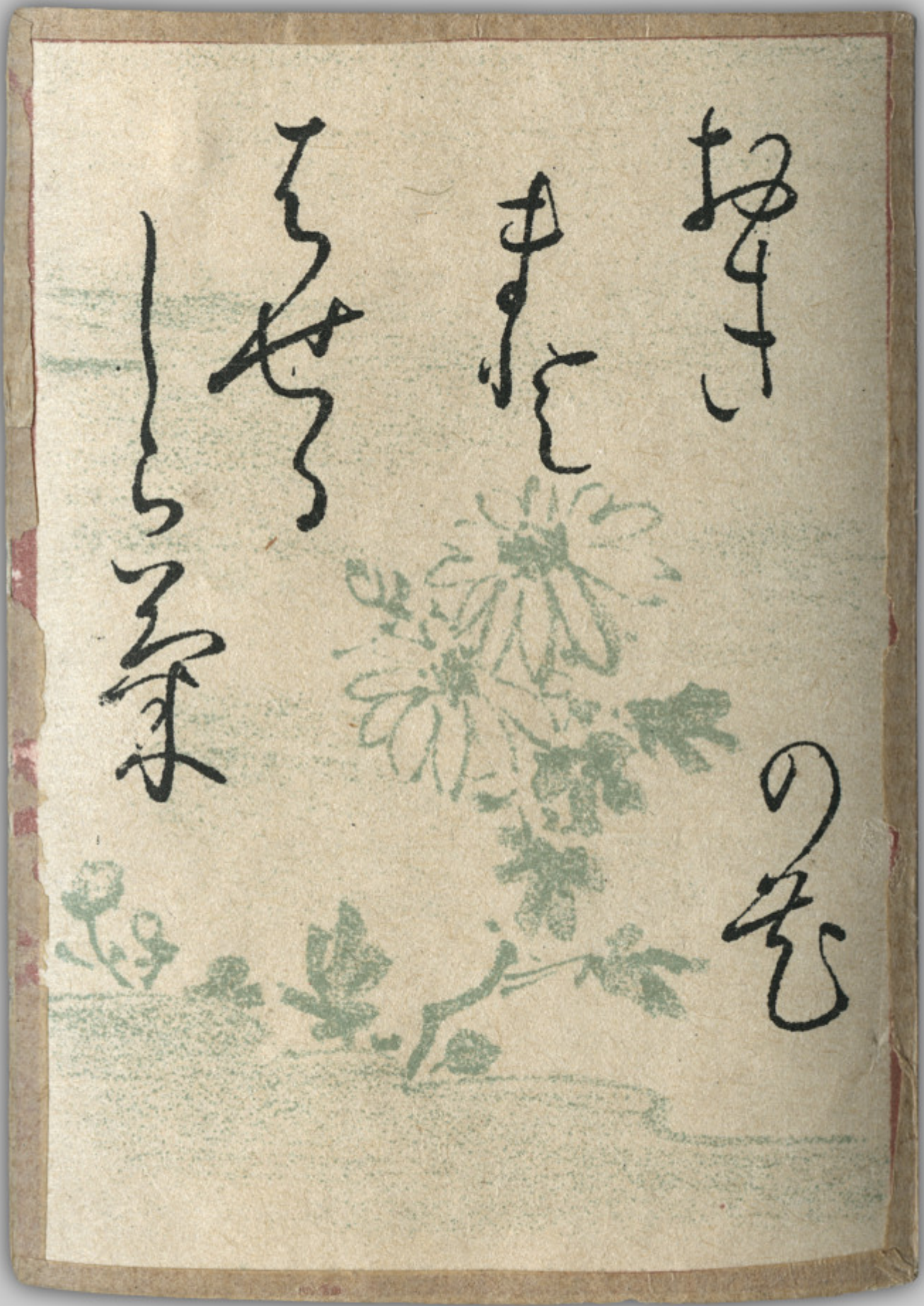
月をもち

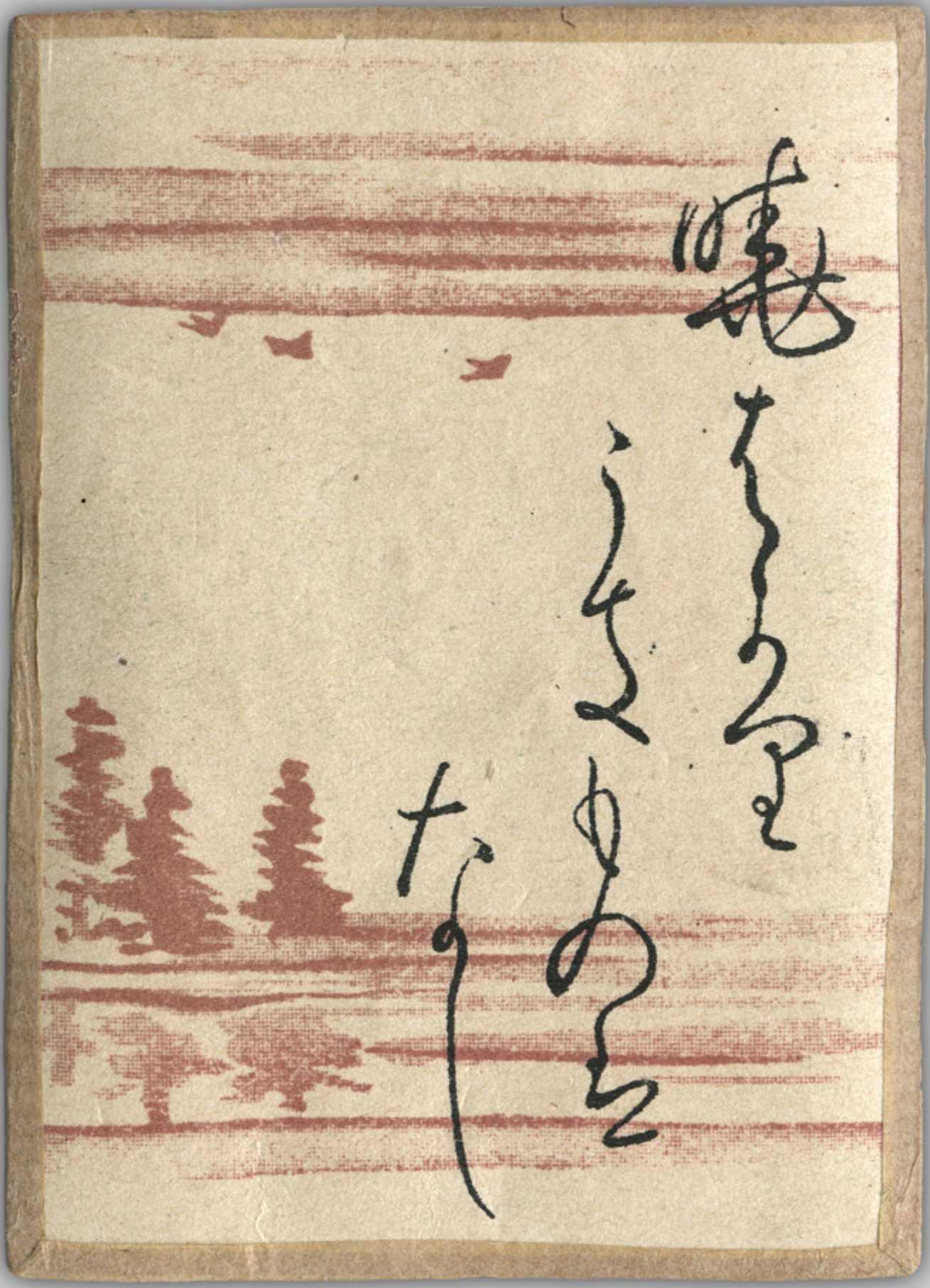


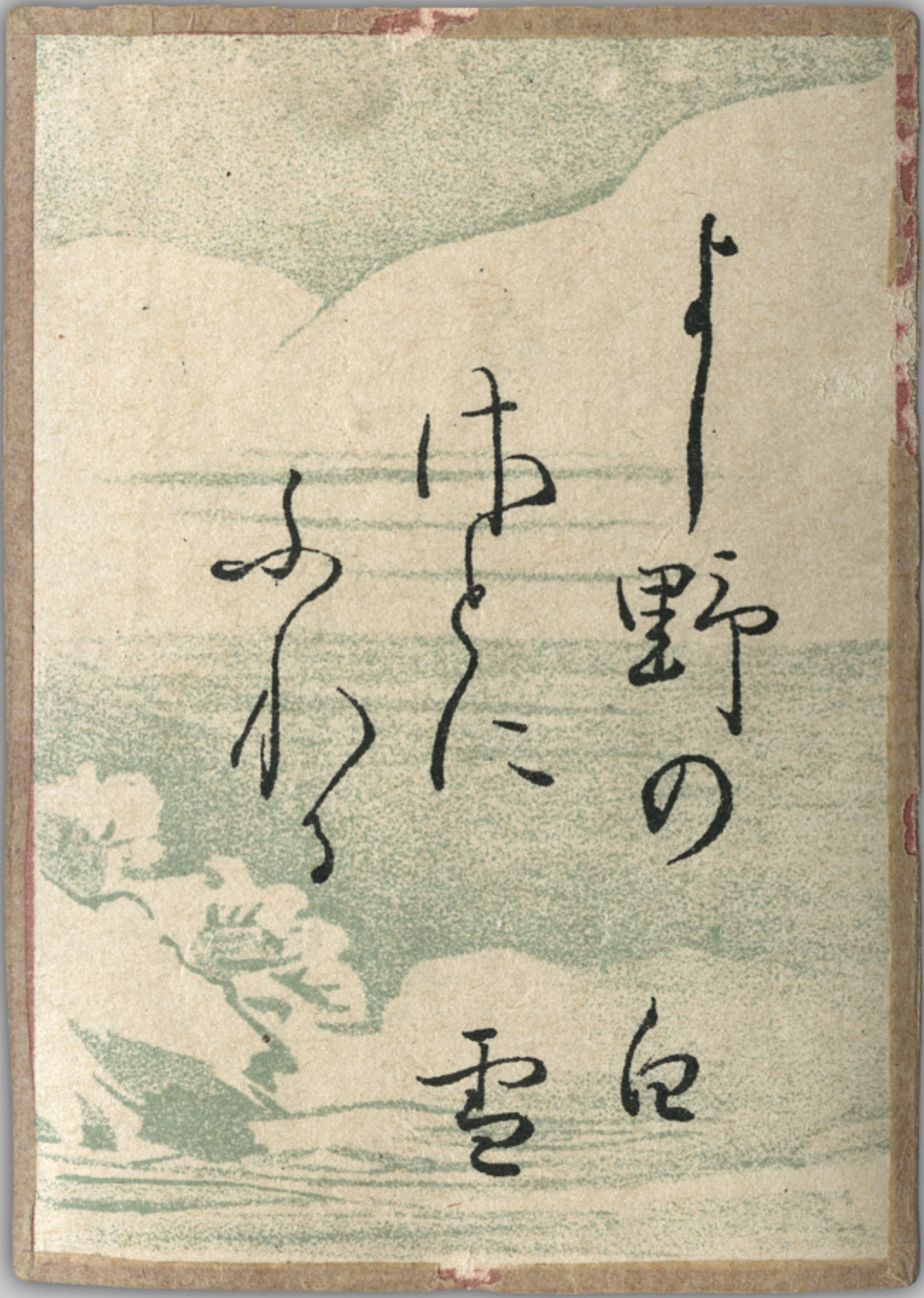


神のくに
まちの様

今
みれ
て
春
はる
ぞ
よ
れ






千野の
はたに
ふる
白雪

松もまの
とをかち
ふる雨

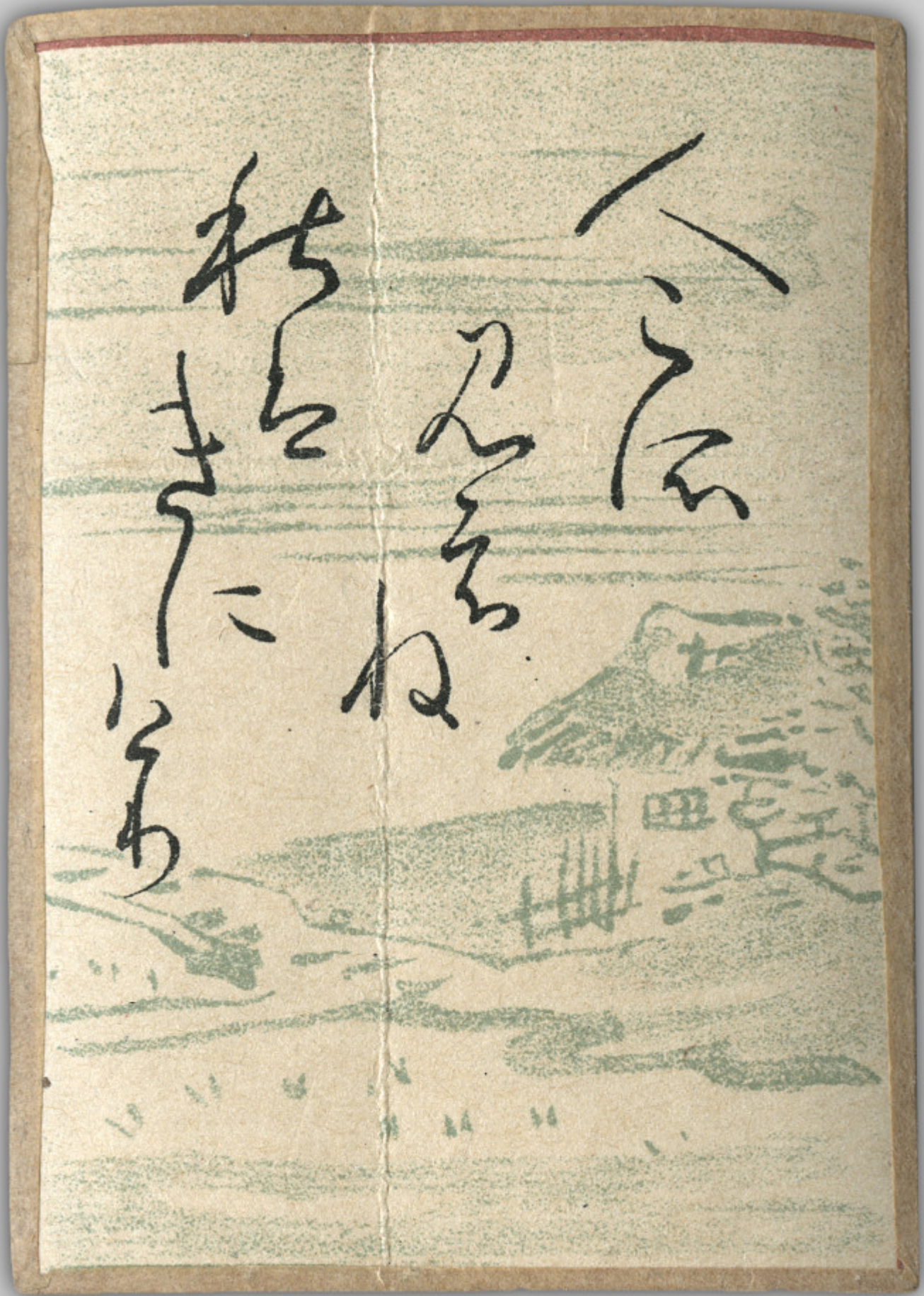
ᠮᠣᠩᠭᠣᠯ ᠤᠯᠤᠰ
ᠤᠨᠳᠦᠰᠲᠡᠨ ᠤ
ᠵᠠᠰᠠᠭ ᠤᠨ

# 父の若き日

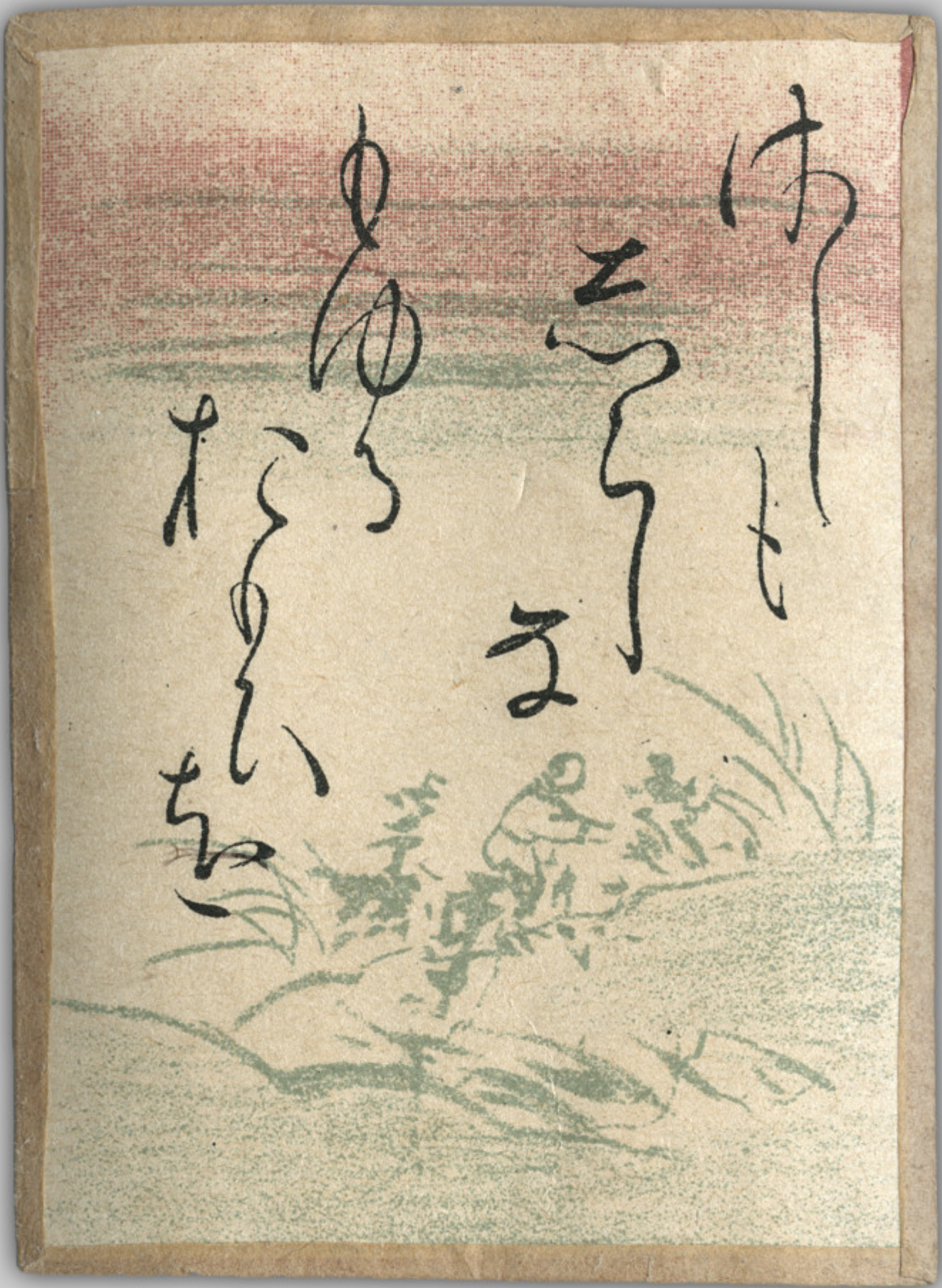
なまえをきくのもわすれ

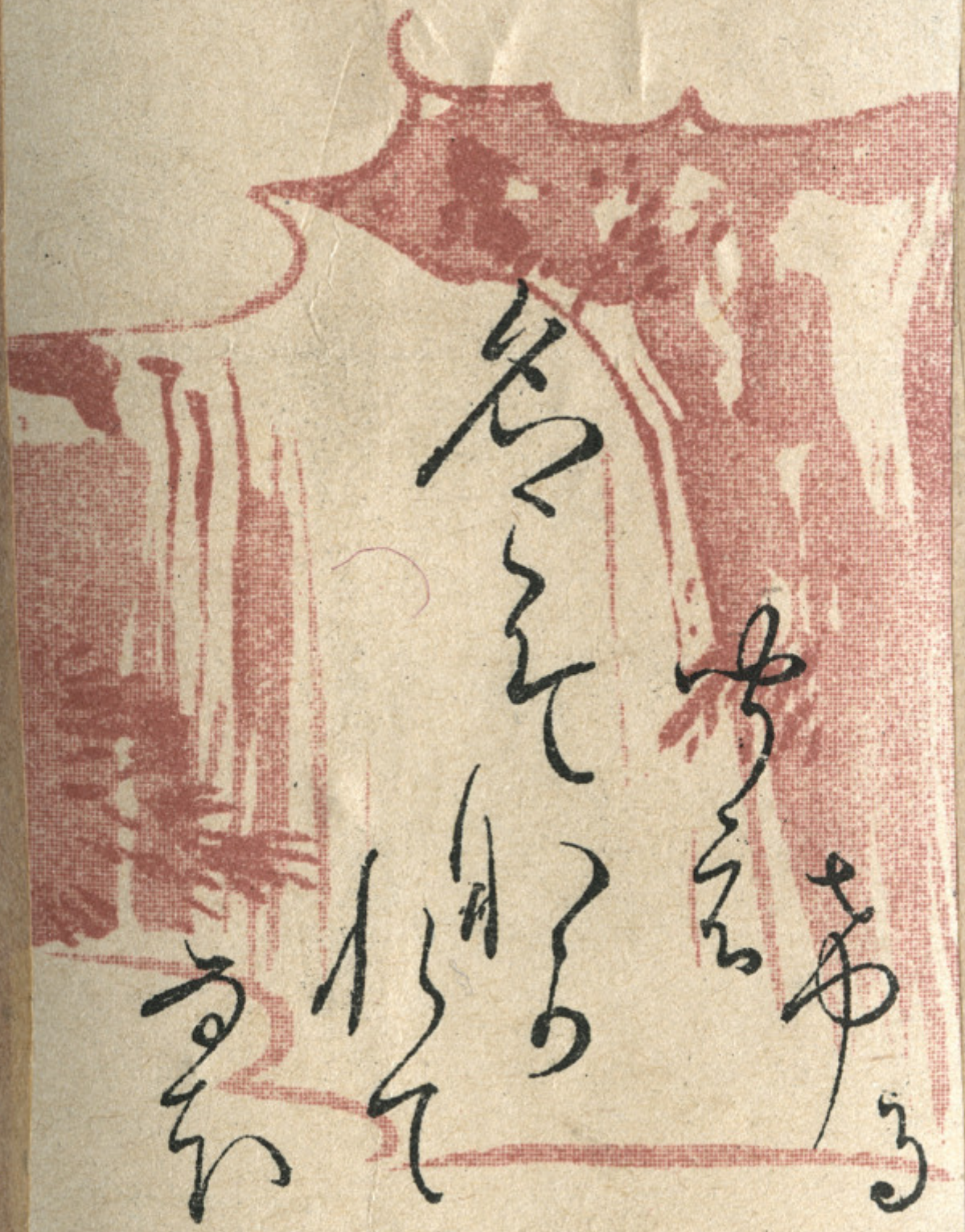
末の松山
なみこさじ

おもふ
ひとに
うわめ
つかひ
し



# ᠮᠣᠩᠭᠣᠯ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠲᠦᠤᠬᠡ





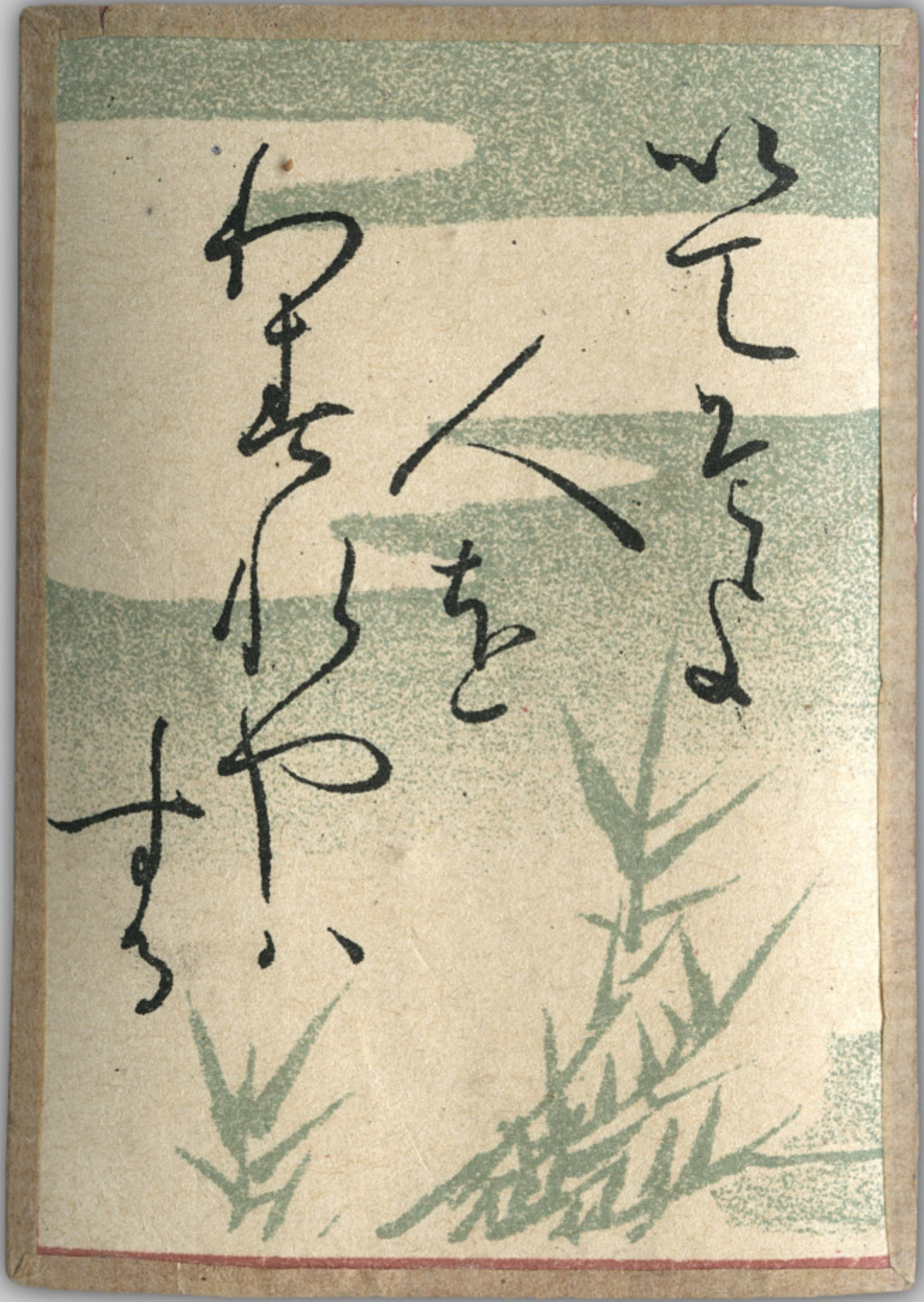
乃友一六

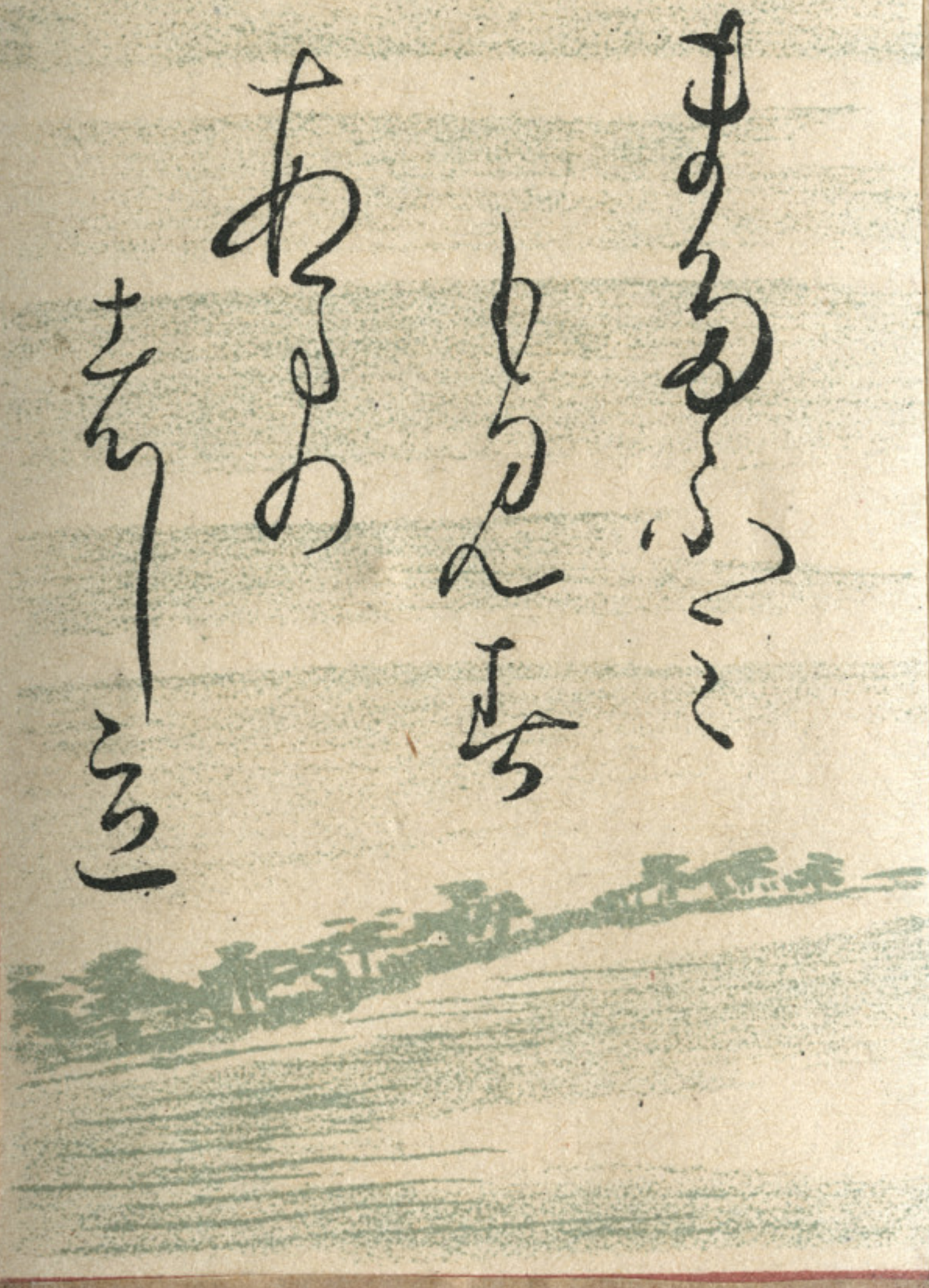
ふあ

こともと

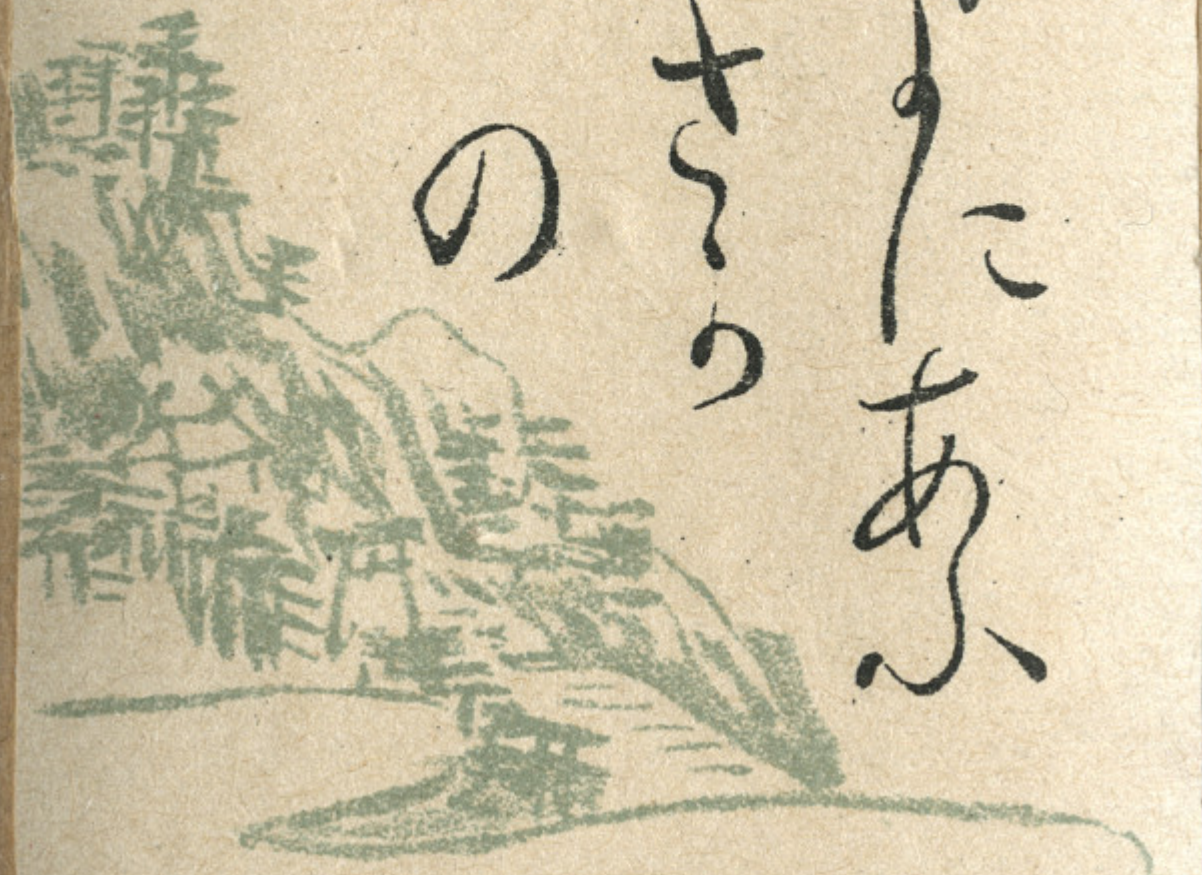
雲うつれ

よるの月





東京名所

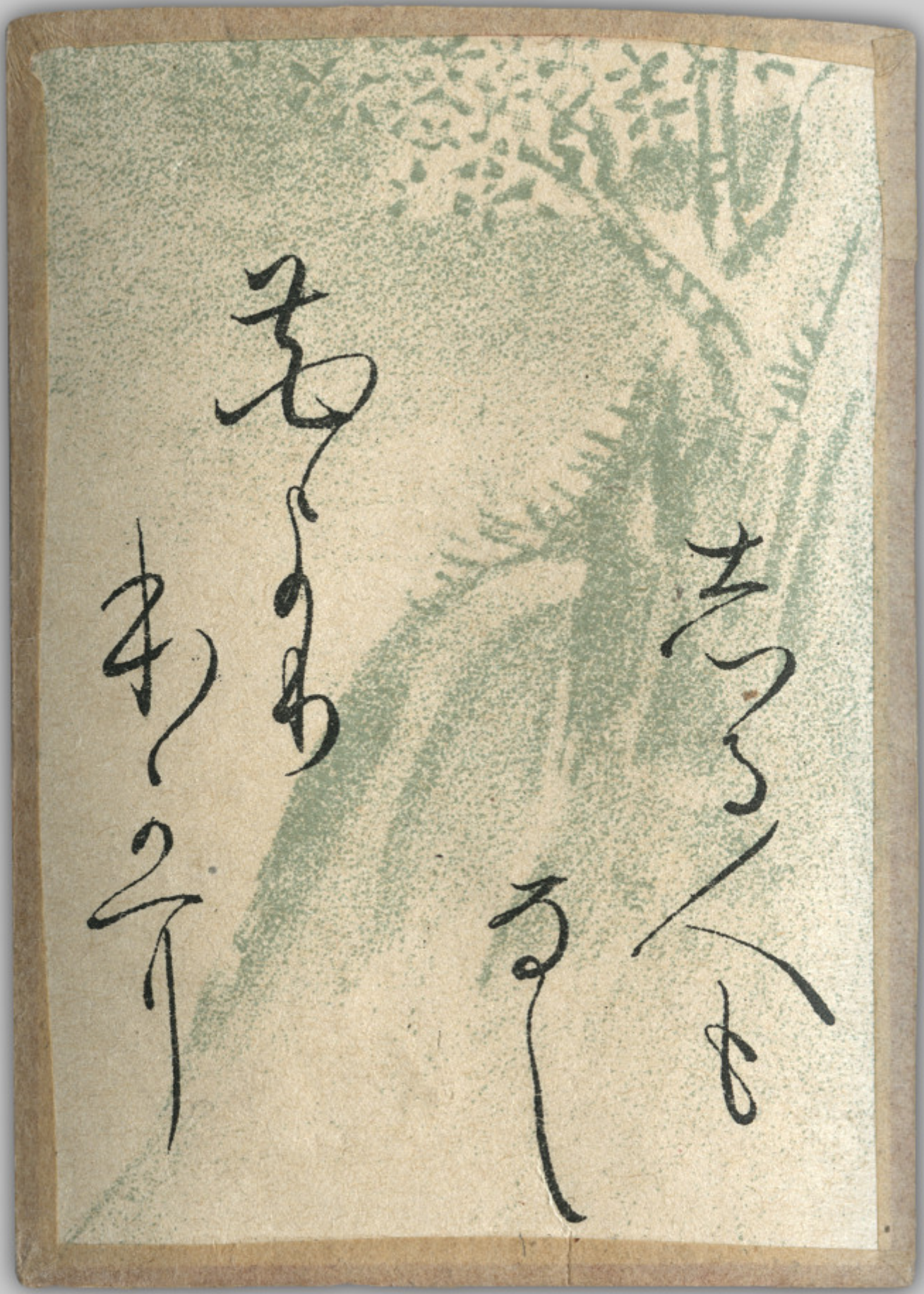


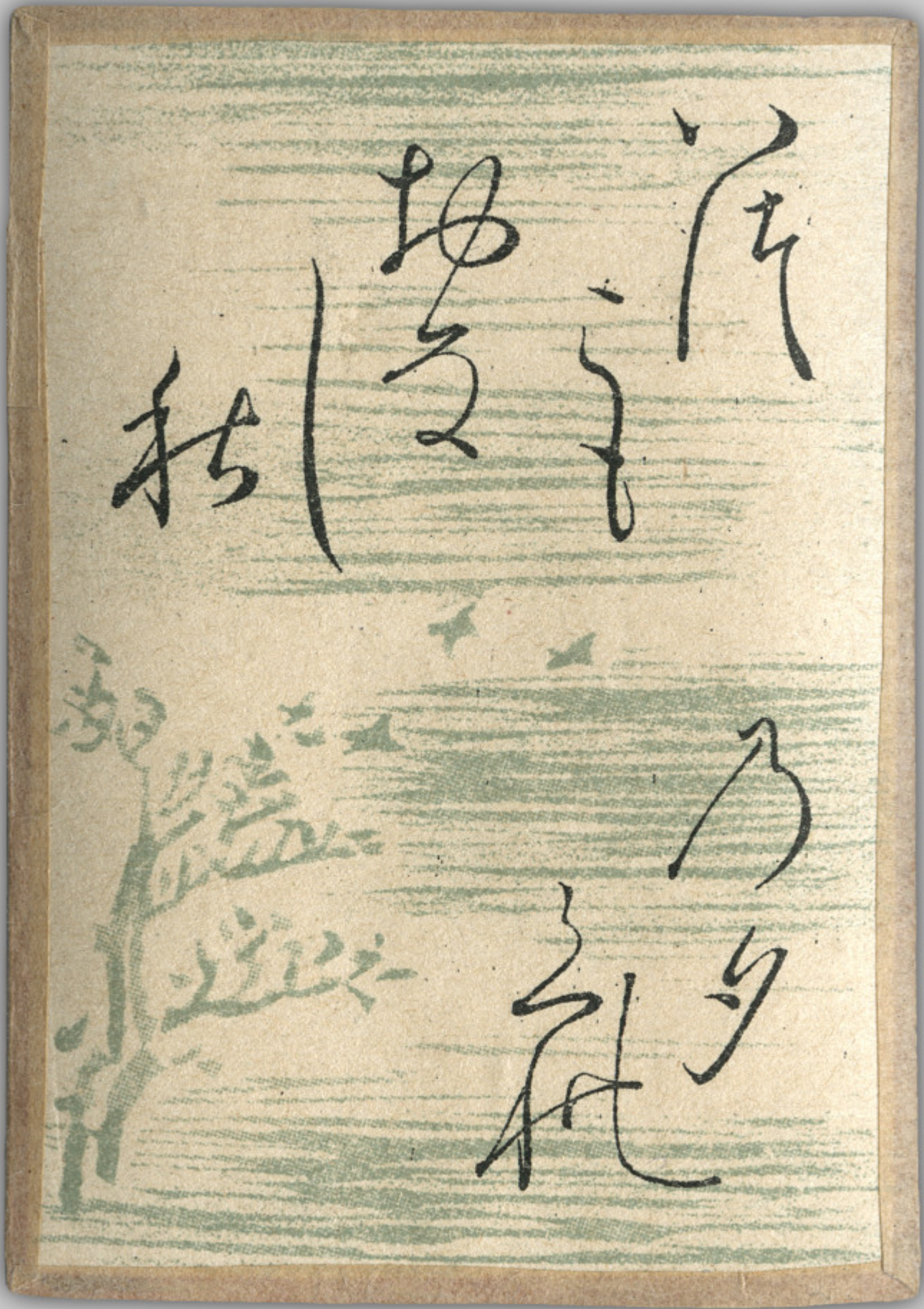
ずたあふ
さくら
の

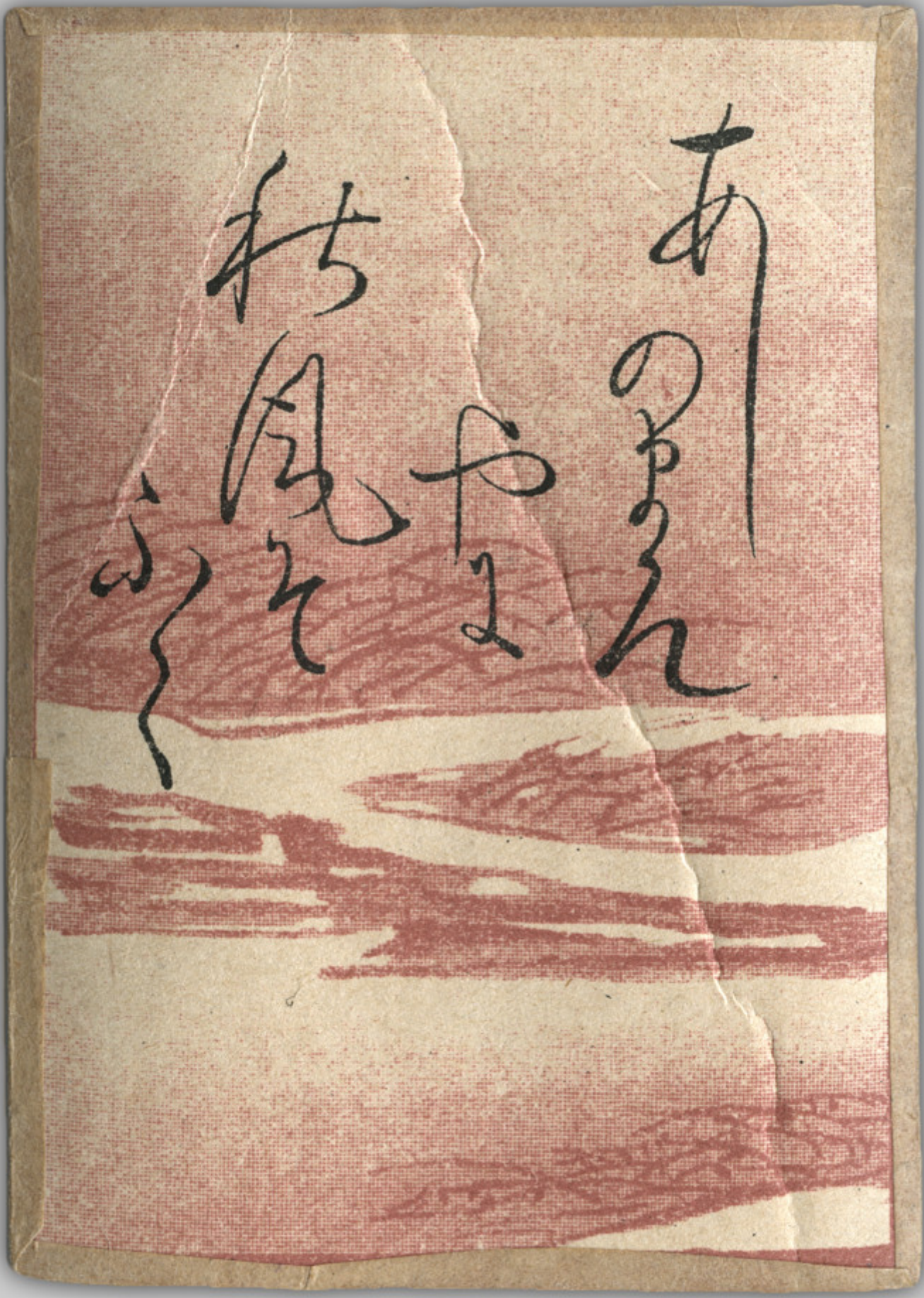
さくら
ゆふ

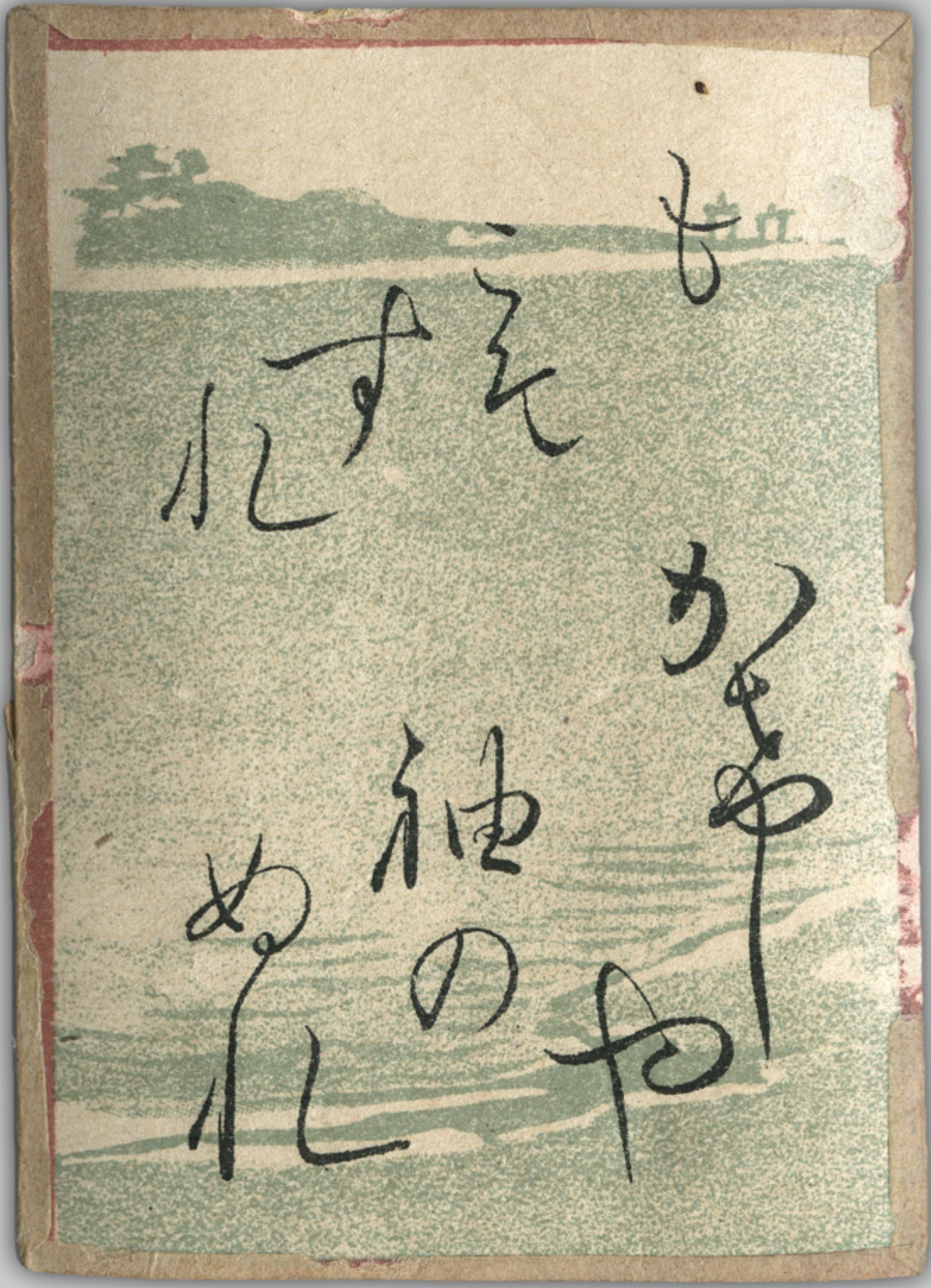
ཀུན་ཏུ་བཟང་པོ།

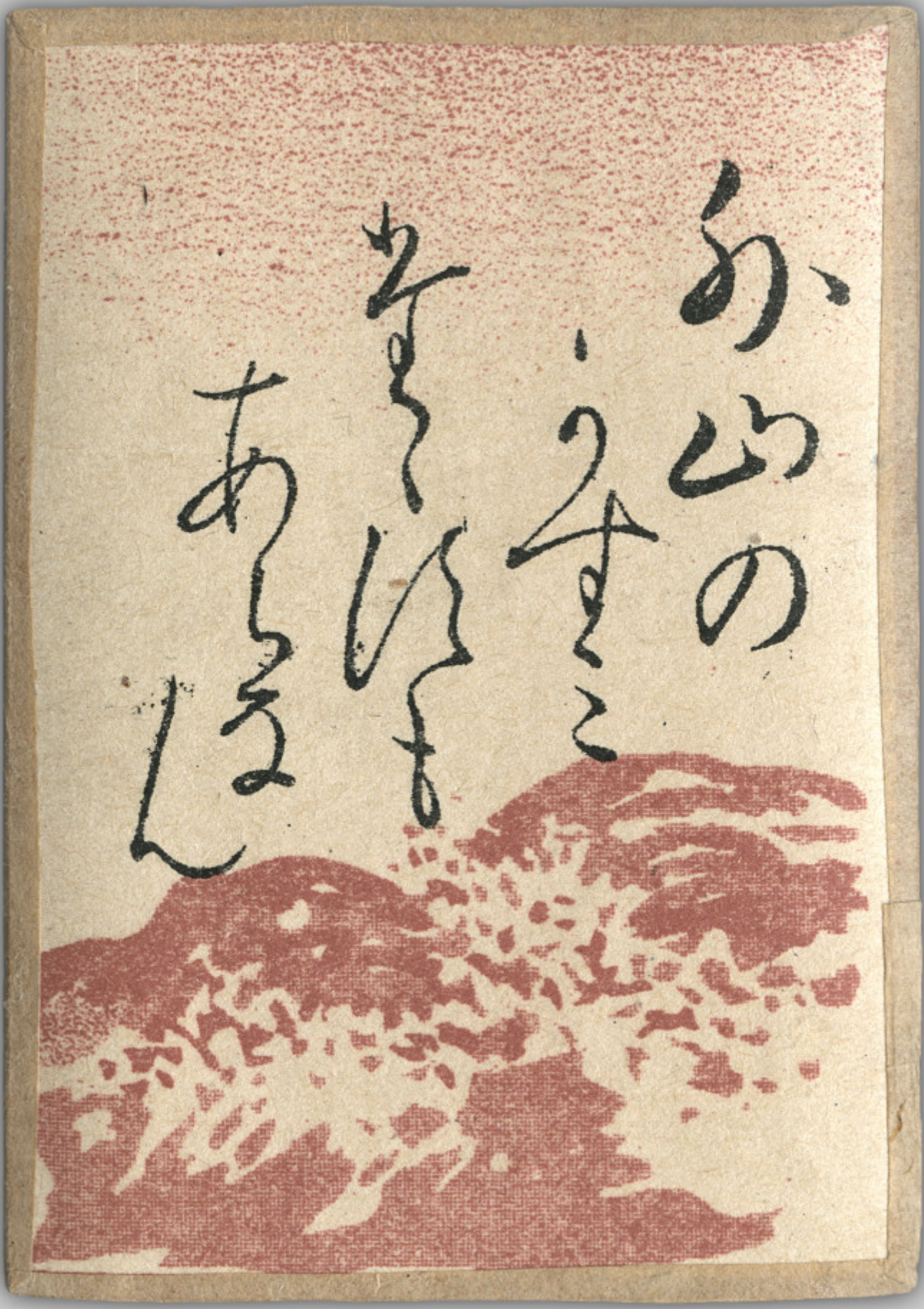
あらし
あらし
きの
あらし

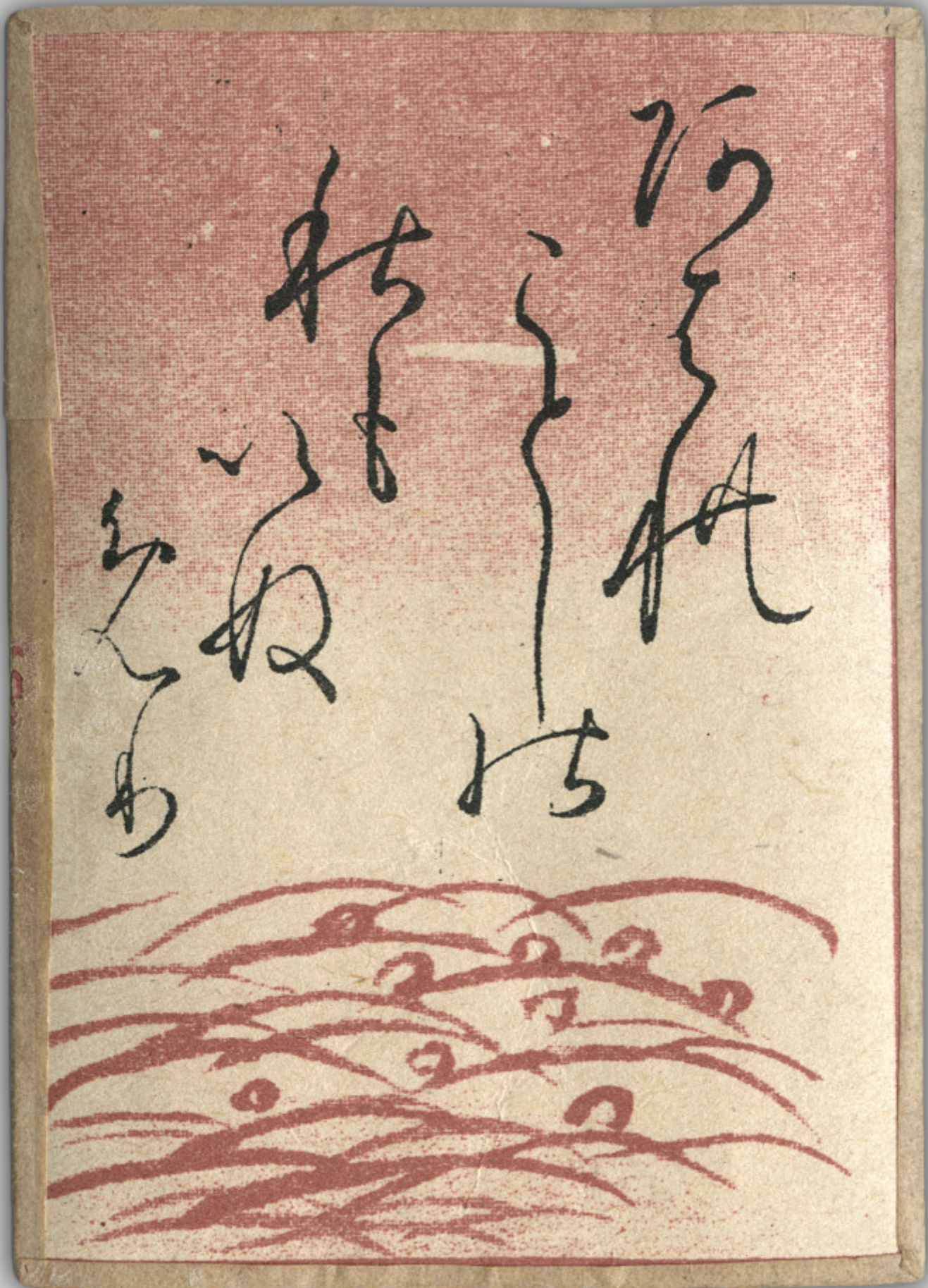


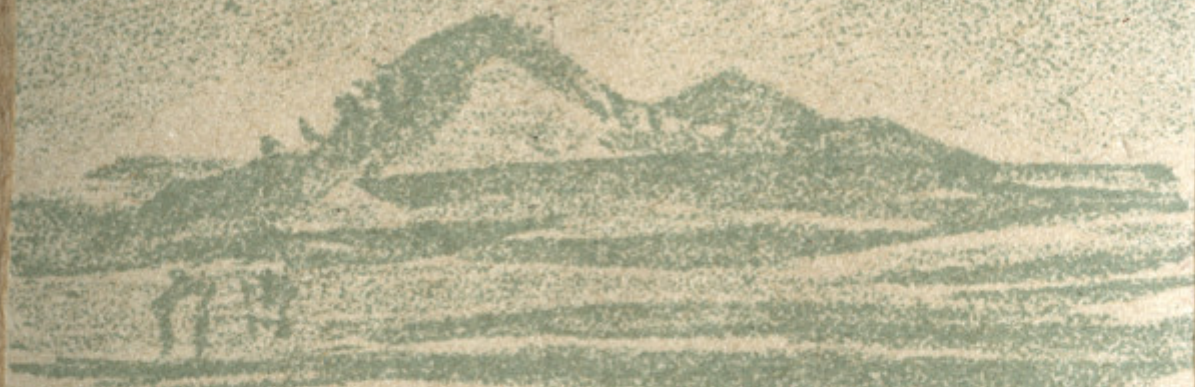



杉風へ

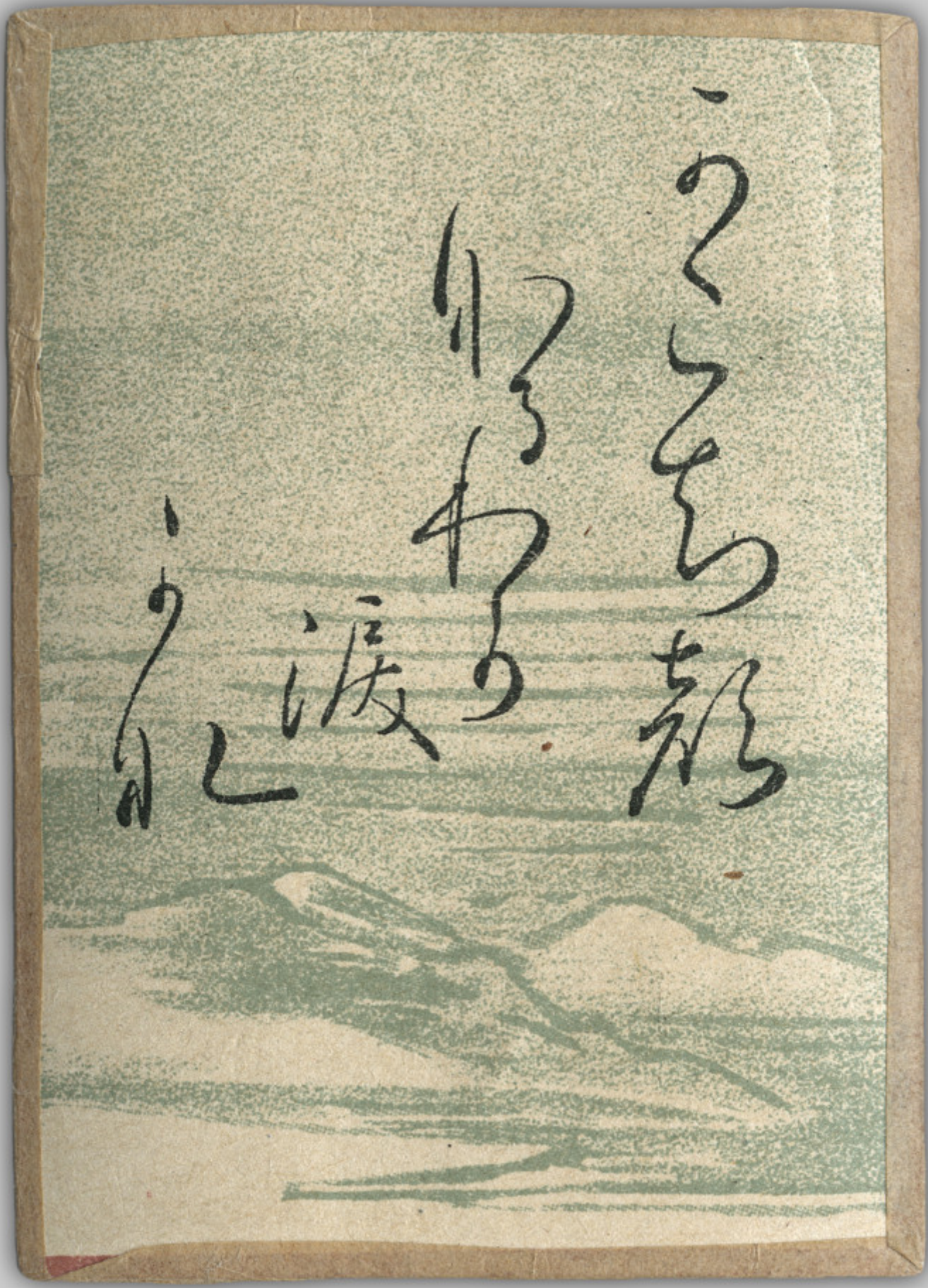


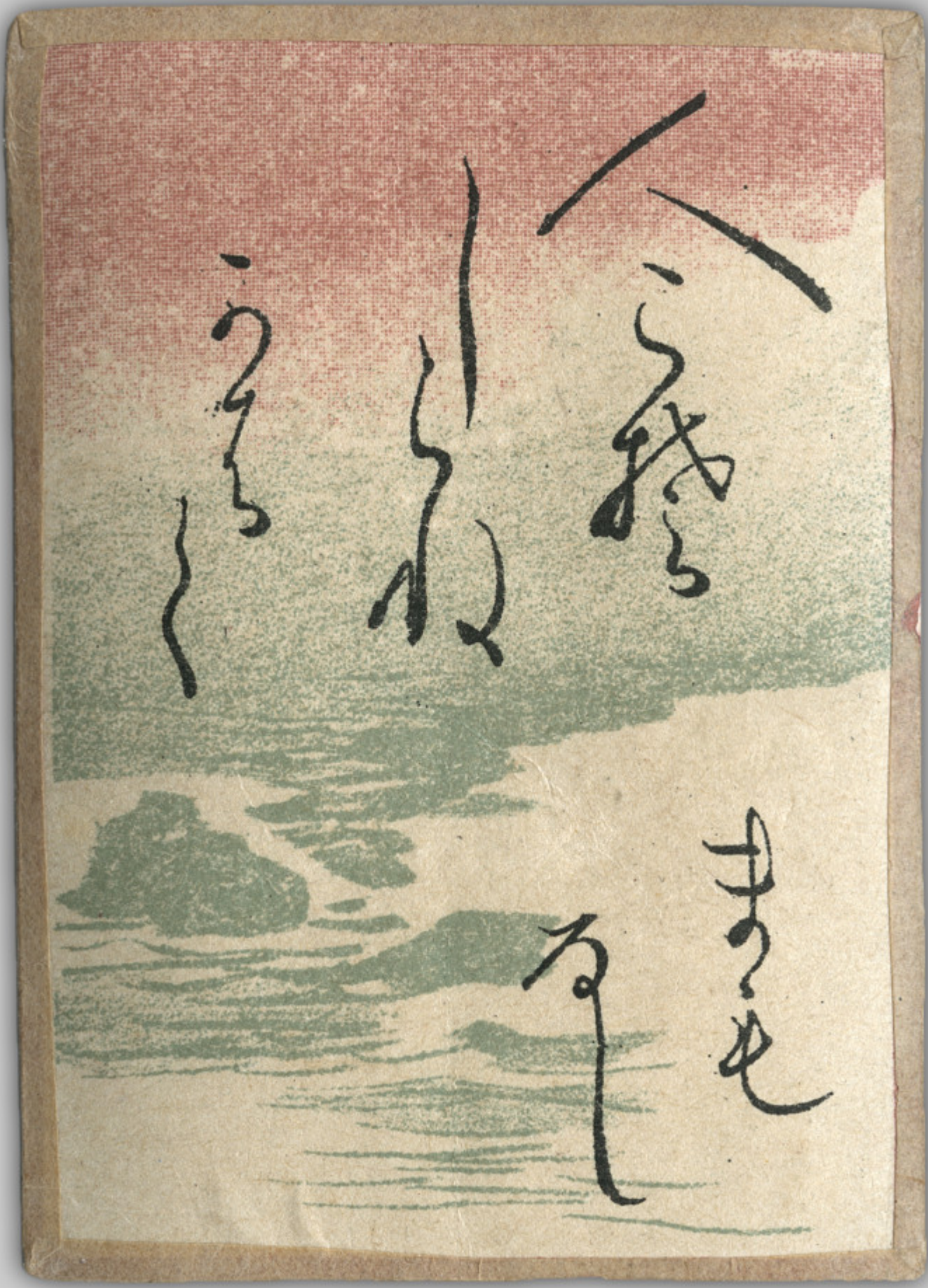


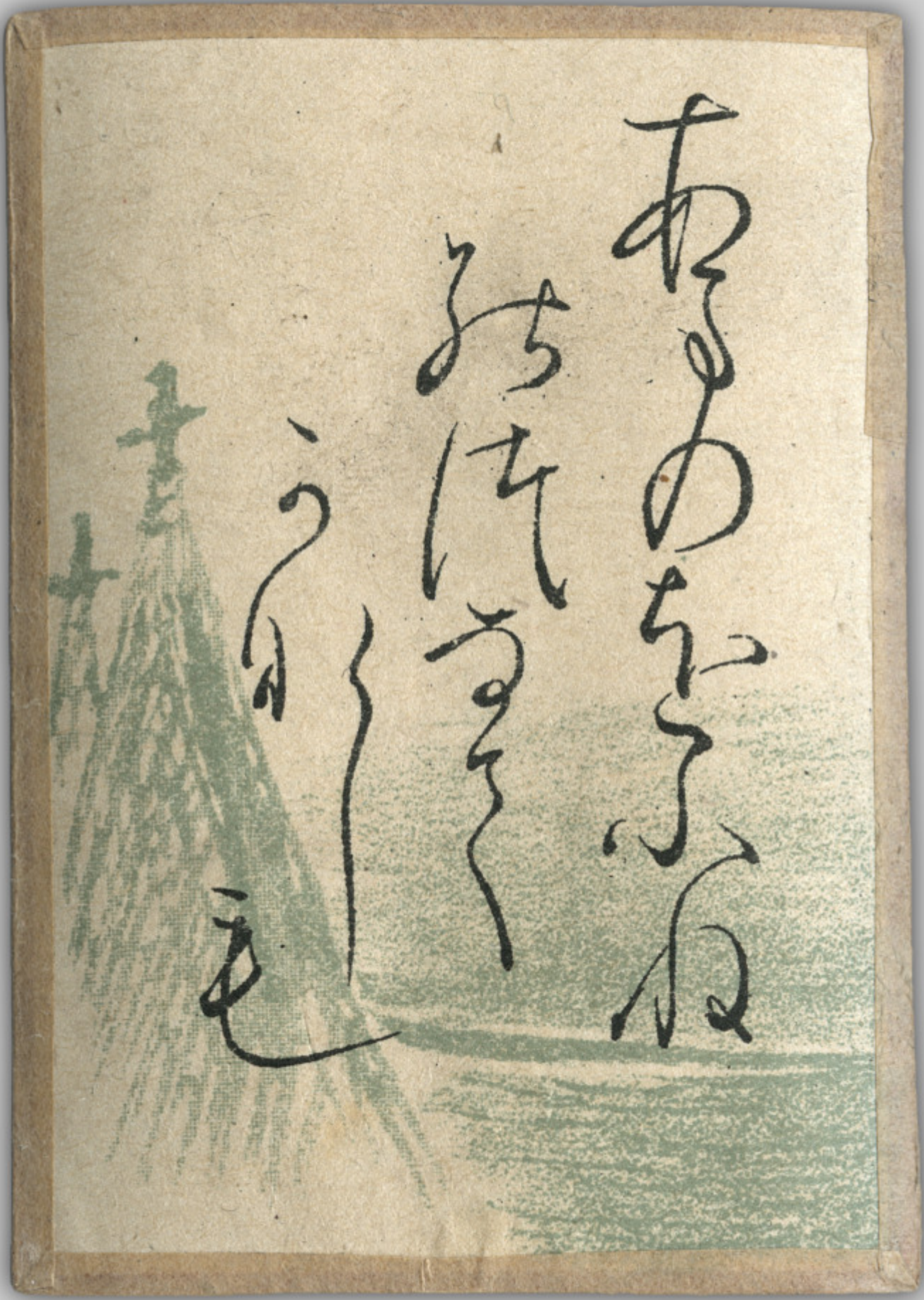




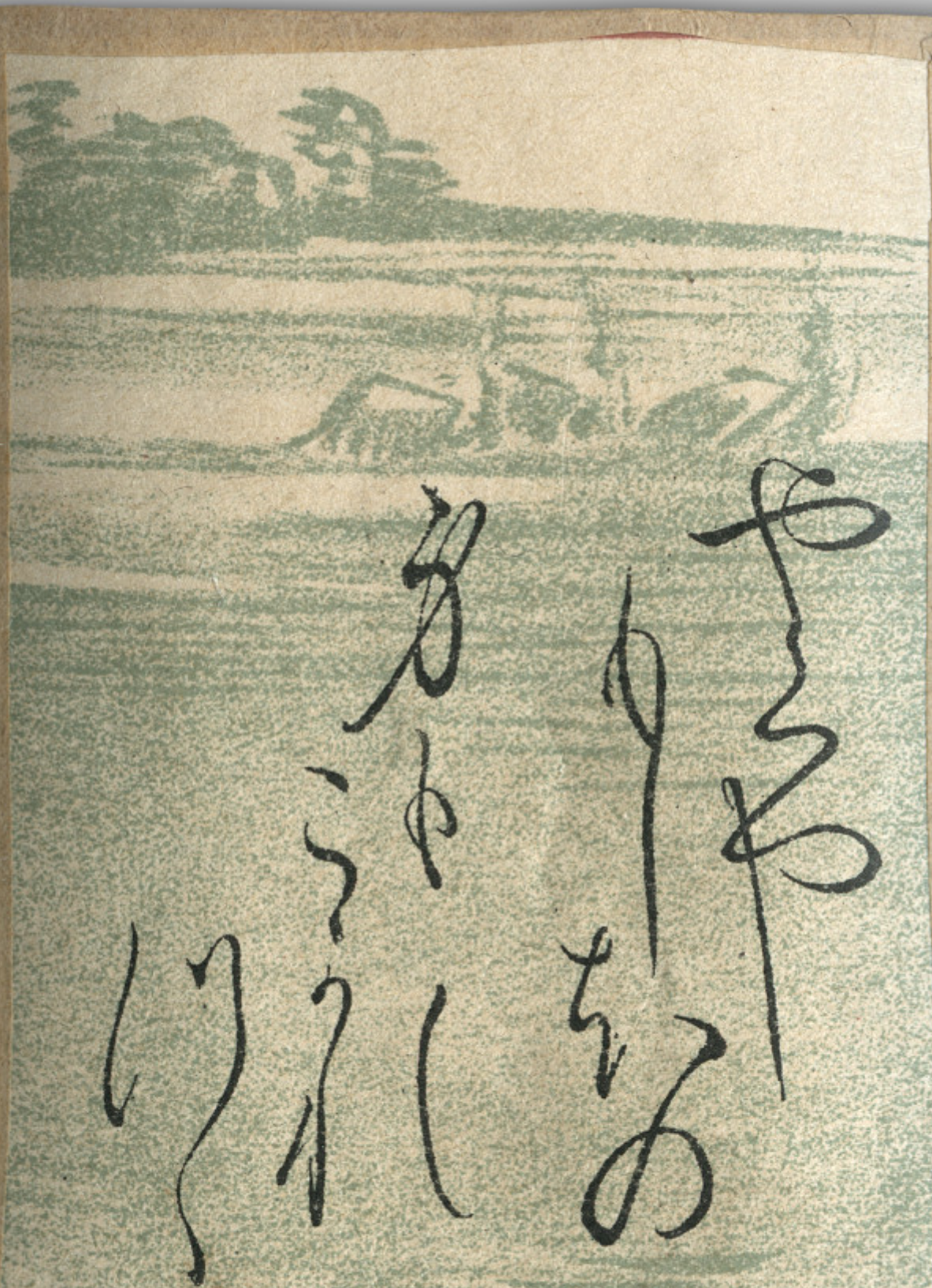
移りゆく
時をうつして
ふるさと







婦つるゆ
ゐなとも
とへすわ
まゐり



なほあまりある者なりけり